
白兎は嗤う

桐龍朱音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白兔は嗤う

【Nコード】

N4348H

【作者名】

桐龍朱音

【あらすじ】

私の名前はアリス。それ以外は何も憶えていない…… ———— そんな少女が目覚めたのは棺桶の中。彼女を取り巻くすべての謎の答えは彼女の眠った記憶の中にあるという。アリスを求め狂う「緋月の国」の住民達に翻弄されながら彼女は血塗られた道を歩き始める。眠った記憶はアリスに何を教えてくれるのか。そして彼女が辿りつく先は果たして…。

【prologue】 tea ceremony

緋^{あか}い月が闇夜に浮かんだなら
それは君とのお茶会が始まる合図
紅茶の匂い漂わせ
僕は君を迎えに行くよ

君のために用意した
美味なる混沌の紅茶を召し上げれ
もしも苦いというならば
快樂の角砂糖を入れなさい
悪戯にスプーンで掻き混ぜて
そつと一口啜つてごらん？
喉を掻き毟るほどの美味しさですよ

さあ、クッキーはいかがですか？
さあ、チョコレートはいかがですか？
妄想から作り出された茶菓子を食べて
混沌渦巻く紅茶を飲んで
他愛もない虚飾のお喋りをいたしましょう
密やかな笑みを交わし合うことも忘れずに

些細な君の一挙手一同に
僕は狂喜でこの身を震わせて
欲情せずにはいられない
君をそつと視姦して
この手で犯せる時を妄想しながら
紅茶を啜り茶菓子を食べる
ああ、なんて素敵なお茶会でしょう

緋い月の光を浴びながら
永久に続くこのお茶会
一度開いてしまったなら
もう二度と終焉おわりはやってこない

いつまでも続く月夜の中で
いつしか君の純白のドレスは緋く染まり
微笑みさえも血ぬられる

純粹な君よさようなら
汚れた君よこんにちは

僕は君を緋い月夜のお茶会に縛り付け
君は僕を狂った欲望の奥底に縛り付ける

そんな捕らわれあつた世界の中で
君が狂い乱れていく

その姿を愛おしく思うことが罪というならば
僕は喜んで咎人となろう

逃がしてんかあげないよ
終わりになんかさせないよ

緋い緋い月夜のお茶会
その身が果てて魂となっても
僕とずっと続けましょう…？

【chapter?】 White rose

——時計の音がする……

首に垂れ下がる銀時計。

もう長いこと動いていなかったその針が何の前触れもなく動き出す、小さくも確かなその音を僕の耳は聞き逃さなかった。ゆっくりと銀時計の蓋を開け、文字盤を確認する。やはり、針は動き出していた。

——アリスが目覚める!!

この銀時計はアリスが生きる「時」を刻む。
アリスが眠りについてからの500年間、一度も動かなかったこの時計が再び動き出したということは、アリスの「目覚め」が始まったということだ。

——ああ、やっと……やっとアリスに会える!!

あまりの嬉しさに「白薔薇の茶会場」に咲き誇る白薔薇の一部分を

根こそぎお気に入り
の黒い鎌でなぎ払ってしまつた。
儚く散っていく
白い花弁が雪の
ように僕に降り注いだ。

——この時を……この時をどれほど待ちわびていたことか……

白薔薇をなぎ払つても体中を駆け巡る喜びは止まらない。
嬉しくて、嬉しくて、白い花卉の中で狂い死にしていまいそうだ。
心の奥底から湧き上がる笑みのせいで顔が引きつったように痛い。
後から後から笑いがこみ上げてくる。

[illegible]

ああ、今日はなんて素晴らしい日だろう。

長い歳月の中で、ひたすらに願ひ続けてきた「目覚めの日」がついにやってきたのだ！

狂おしいほど愛おしく思い続けてきたアリスが、もうすぐこの手に

⋮

「そうだ！こうしちゃいられない。アリスの目覚めのお手伝いをしなくては！！」

銀時計の蓋を勢いよく閉め、「白薔薇の茶会場」を走り抜ける。走る度に白薔薇が無残に散っていく。

こんなに白薔薇を台無しにしてしまった後は後で女王陛下にお叱りを

受けるだろう。

しかし、そんなことはどうでもいいのだ。

アリスが目覚めることに比べたら、女王陛下のお叱りなど取るに足らないこと…。

「アリス、アリス、アリス…！！」

「純白の宮殿」にいる愛しきアリス。

僕が今、「漆黒の棺桶の封印」を解いてあなたを目覚めさせてあげよう。

だから目覚めたその時には…

「僕と「緋い月夜のお茶会」の続きをしましょう？。」

【chapter?】 wake up !

——アリス…

優しい響きをした低い声が私を呼ぶ。
どうしてだろう。
知らないはずの声なのにとっても懐かしく思う。

——アリス…

知っているのに、覚えていない。
まるで遠い昔の記憶の中から呼ばれているような、奇妙な感覚。
魂の奥底を揺さぶりながら私の耳に響いてくるこの声は一体…？

——アリス…

誰？

私を呼んでいるのは誰なの？

——アリス…目を覚まして？

目を覚ます…？

私は眠っているの？

そういえば、さっきから何も見えない。

真っ暗な闇、闇、闇。

そして低く優しい声。

今、私が感じられるのはそれだけ。

——アリス、目を覚まさないで殺されちゃうよ？

低く優しげだったな声が残忍な笑い声を含んだ冷徹な声に変わる。

その声は闇の奥底からその身を擡げ、私の背を這い上がり耳を震わせる。

戦慄が体を駆け巡る。

——アリス、メヲサマサナイトコロサレチャウヨ？

「っ…！！！！？」

目を覚ますと七色に輝く円形のステンドグラスが目に入った。
その向こうに広がっている青空からの光を受けて、七色が多種多様にそして繊細に折り重なって見事な色のコントラストを生み出している。

目覚めたばかりのぼんやりとした私の瞳にさえも、その色のコントラストの美しさは十分に伝わってきた。

「ここはどこ…？」

ステンドグラスの光に照らされながらまだはつきりしない頭で必死に記憶を辿る。

私はどうしてここにいるの？

何のためにこんなところにいるの？

何よりも、「私」という人間はどんな人間なの？

記憶の奥底に潜り、考え、その答えを探しだそうとする。

けれど、何も思い出せないし何も分からない。

自分の顔がどんなだったかさえ分からない。

生い立ちも、ここまでの記憶も何も思い出せない。

ただ一つ、自分の名前が「アリス」だということ以外は——…

「私は…アリス」

たった一つの記憶を呟く。

「自分」という存在をここに繋ぎ止めておくものが私には名前しかないのだ。

それに縋って「私」を思い出すしかない。

何故思い出さなければいけないのかは分からないけれど、胸の奥で何か「早く思い出せ」と叫んでいるような気がする。

「思い出さなければ大変なことになる」という恐怖が湧き上がってくるのだ。

「思い出さなきゃ……」

決心を固めたはいいけど、このまま寝そべっては何もできないのでとにかく起き上がることにする。

長い間動いていなかったのか、ひどく体が重く感じた。

ただ起き上がるだけなのに随分時間がかかった。

「何これ……棺桶!？」

起き上がってみて気がついたことに驚く。

私が寝そべっていたのはなんと黒々と輝く棺桶の中だったのだ。

つまり、傷も汚れもない綺麗な棺桶の中に私は埋葬された死人のよう横たえられていたということになる。

背筋に悪寒が走った。

——何で……? 何でこんなところに私は……

ふと横に視線をずらすと、少し離れた所に棺桶の蓋の部分が置いて

あるのが見えた。

頭の方に大きな赤い十字架が描かれている。

その蓋の側には銀色の太く長い鎖が無造作に置かれていた。

——もしかしてこの棺桶、あの鎖で巻かれていたの…？

重々しい銀色の鎖でぐるぐると巻かれた棺桶が頭に浮かぶ。

それはまるで何か邪悪なものを封印しているかのような光景だ。

やっとの思いで眠らせた邪悪なものにしっかりと蓋をして、鎖でさらに守りを固めて二度と目覚めないようにここに封印している。

そんな風に思えるのだ。

——私は…邪悪なものなの？

けれどそこまで考えてふと思いつく。

鎖は解かれ、蓋は開けられていた。

棺桶の作りの頑丈さからして中からは開けることはできないだろう。

第一、自分で開けた記憶がない。

まあ、名前以外覚えていないのだから「開けた記憶がない」という考えは説得力無いけど、中から開けられないという事実は変わらない。

ということとは——棺桶を開けた誰かがいる！！

今更ながら慌てて辺りを見回してみるが、誰もいない。

よくよく感覚を研ぎ澄ませてみるが人がいる気配は感じられない。棺桶を開けた誰かがいるのは確かだけれど、どうやらその「誰か」は今この場にはいないようだった。

——誰が開けてくれたんだろう。それにこっつて…何の建物…？

「誰か」を探すのは諦めて、もう一度ゆっくりと辺りを見回してみる。

私が寝そべっていた棺桶は円形の小さな舞台のようなものの上に置かれ、この建物のちょうど中央に位置しているらしい。

この舞台は周りより少し高く作られており、円の淵に沿うようにして数段の階段が扇のように広がって伸びている。

その階段から少し離れた所からこの舞台を取り囲むようにして無数の客席のような椅子が円形に広がっているとすると、どうやら私の棺桶が置いてある円形の舞台を中心に同じように円を描いて広がっていく構造をした丸い建物であるらしい。

天井はかなり高く、建物の奥行きもけっこうある。

出入り口らしい大きな扉がかなり遠くに見える以外には他に外に出られそうな扉はない。

窓は寝そべっていた時に見えた円形のステンドガラスの天窓があるが、高すぎて届かない。

そういえば、あのステンドガラスの円の大きさはこの舞台の円の大きさと同じくらいようだ。

薄気味悪く感じるほど、何もかもがきつちりと何かしらの規則にのっとって作られている。

——でも、一番気味が悪いのは白いことね…

ステンドグラスとこの棺桶以外何もかもが白かった。壁も椅子も床も、扉も白一色で統一されている。棺桶から出て、立ち上がってみるとまるで白さの中に飲み込まれてしまいそうな気がする。

——おまけに私も白だし…

立ち上がって見下ろした自分の姿は白一色だった。白いエプロンドレスを着て、お上品なレースがついた白い靴下を履き、さらにその靴下を光沢のある白一色のショートブーツが覆っている。

ドレスの裾から見える肌も病氣なんじゃないの？ってくらい白いので、まさしく全身真っ白けだ。

ドレスや靴自体は可愛いデザインのものなのだけれど、ここまですべて徹底的に白で統一するなんてセンスを疑う。

記憶がないから何とも言えないけど、もしこの白一色という色のセンスが過去の自分のセンスだったとしたら絶望的だ。

——まあ、髪は白くないからまだマシよね…

今まで目に映るものはすべてが白かったけれど、腰のあたりまで伸びた長く真っ直ぐな髪は綺麗な金色だった。

これで髪まで白かったら、もう笑うしかなかったに違いない。

—— あれ…？私なんかつけてる…？

あれこれ見るために首を動かしていたら、ふと首の周りに違和感を感じた。

手を当てて違和感の正体を目の前に引っ張り出してみると、エプロンドレスと胸の間から緋色の小さな丸いペンダントが出てきた。

—— 不思議なペンダントね。色の濃さが変化してる…

ペンダントの緋色は薄くなったり濃くなったりとその姿を変容させていた。

そんな緋色の変容は流動する血を彷彿させ、このペンダントが生きているかのように感じた。

—— まあ、これで少しは自分のことがわかったわね。

髪は腰まで伸びた金色の直毛。

肌は透けるように白く、着ているエプロンドレスや靴下、靴までもが白一色。

首から下がっている丸いペンダントは白に映える緋色。

体系は細身で手足はそこそ長く、けっこうバランスがとれていると思う。

顔はまだわからないけれど、体はなかなかいいんじゃないの？

——よし。それじゃあ、ここから出てみるか。

自分のことが少しわかったことでちょっと勇気が出てきたので、外に出てみることにした。

ずっとここにいたって仕方ないしね。

分からないなら進んで探すしかないもの。

階段を下りて扉へと向かて行く。

歩く度にコツ、コツ、というブーツの音が響く。

しかし、何歩か歩いてあることに気がついた。

自分の靴音の他にもう一つ別の靴音が重なっている。

「…誰？」

立ち止まり、振り返る。

見えるのは白一色の世界に黒い棺桶。

その他には何も無い――…

「ああ、アリス。会いたかった…！」

不意に後ろから抱きしめられる。

低く優しい声が耳元を擦る。

微かに、紅茶のような香りがした。

「あなたが眠りについた500年前からずっとこの日を待っていたんだよ…？」

――誰なの…？

密やかに囁かれるその声に心が騒ぐ。

胸の奥底からこみ上げてくる懐かしさに目がしらが熱くなる。

――知らないはずなのに、どうしてこんな気持ちになるの？

「Let's give a tea ceremony with me？」

涙が頬をつたって落ちていく。
懐かしさと恋しさ、そして恐ろしさが混ざった不思議な涙だった。

【chapter?】 who are you ?

魂の奥底を揺さぶりながら耳に響く優しい低い声。

悪戯に鼻を擽る微かな紅茶の香り。

まるで壊れ物のようにそっと、それでいてしっかりと抱きしめる腕の温かさ。

——どうして…。

自分の名前しか覚えていないのに。

後ろから私を抱きしめる人のことなんて知っているはずなんてないのに。

何も、誰も、思い出せないのに。

——懐かしい、だなんて…。

声も、匂いも、体温も…今私を包み込んでいるすべてのものを「懐かしい」と感じた。

突然後ろから抱きしめてきた人を「知っている」と思った。

何一つ思い出せないのに、心が、魂が、体が…私の全てが騒ぎ出しているのだ。

私はこの人をとてよく知っている、と。

「…あなたは誰？」

自分的には大きくてすっかりした声を出したつもりだったけど、出てきた声は小さくてしかも頼りなさそうに微かに震えていた。

「ああ、そうでしたね。「再生の眠り」につくとすべての記憶を忘れるようにしたんでしたっけ」

優しい低い声が私の質問を無視して妙なことを呟く。
再生の眠り？

すべての記憶を忘れるようにした？

…訳が分からない。

「あなたは誰？」

訳が分からないことは無視して、もう一度問いかける。
今度は大きくてしっかりした声が出た。

私って、意外と立ち直りが早いのもشれない。

「ああ、すみません。自己紹介もせずいきなり抱きしめてしまっ
て」

するり、と私を抱きしめていた手がほどかれ、次いで目の前にその

手の持ち主が現れた。

動く音も気配もなく、まるで魔法のように瞬きをした一瞬の間にその人は目の前に立っていた。

「僕は白兔のブレイズ。あなたの案内人です」

魔法のように目の前に現れ自己紹介をしてきたのは、理知的な端正な顔立ちに柔らかな微笑みを浮かべた美青年。

雪のように真っ白な肌に映える、ルビーのように美しく輝く真紅の瞳が私の瞳を捉えて、嬉しそうに細められる。

彼が身につけているチョッキとネクタイと長ズボンは闇のように黒く、ワイシャツと手袋は一点の汚れもなく真っ白だった。

そこまでは目が覚めるような美形であることを除けば、私より一つか二つ年上の普通の青年のように見えた。

しかし、彼にはたった一点普通ではないところがあった。

「ねえ、その頭に生えてる耳って…本物？」

白に近い金色のさらさらとした髪の上に、ぴよこんと元気よく生えている兎のような二つの長い耳。

肌と同じく真っ白なその耳は時々ピクピクと動いていた。

色々彼に聞きたいことはあったけれど、何よりもその耳が気になる。いくら記憶がないとはいえ、「常識」くらいは覚えているのだ。

頭に耳を生やした人間なんているはずがない！！

「ええ、本物ですよ。本物の兎の耳」

「ほっ、本物!？」

驚く私の顔をおかしそうに眺めながら「はい」と肯定した。
その声には嘘なんて欠片も感じられなかった。

「本物なら、ちょっと触らせてみてくれない…?」

彼は嘘を言っているようには見えないし、第一こんな嘘を吐く意味が分からない。

だとしてもいまだに信じられない自分がいる。
なら信じられるよう、触って確かめてみればいいのだ。

「あなたならいくらでも触っていいですよ」

そう言うとブレイズはすらりと高い長身を小さな私のために屈めてくれた。

極上の笑顔でのお許しに顔が熱くなるのを感じながらも、私は恐る恐る耳に手を伸ばした。

そして触れた耳の柔らかさと温かさに思わず息を呑んだ。
これは確かに本物だ。

…しかも、ものすごくいい触り心地！！

「…っああ！！」

夢中になって触っていたら、突然我慢するように押し殺した色っぽい声が聞こえてきた。

驚いて手を離しブレイズの顔を覗き込むと、彼は白い肌を火照らせ浅い呼吸を繰り返していた。

「ちょっと、どうしたの！？」

「す…すみません。実はこの耳って一種の性感帯のように敏感で感じやすいんですよ…」

「え？あ、それは…ごめん」

「いえ…」

顔がものすごい勢いで熱くなるのを感じた。

そんな敏感な所をあんなに触っていたなんて、本当に申し訳ない。

性感帯のように敏感って…そこを触りまくっていたということは私は痴女じゃないか！！

恥ずかしすぎる…。

——にしても…。

ちらりとブレイズに視線を向ける。

彼はさつきよりはいくぶん落ち着いてはいたが、まだ白い顔を火照らせたままだった。

呼吸だつてちよつと苦しげだ。

けどその様子は何だかとても色っぽくて、ただでさえ美青年である彼がそんな表情をするものすごい威力があるというか、何というか…。

…顔がさらに熱くなるのを感じた。

「大丈夫ですかアリス？何だか顔が赤いようですけど…？」

「だ、大丈夫！！！気にしないで！！！」

慌てて顔を隠しながら後ずさろうとして、私はふとあることに気が付いて足を止めた。

そのままの状態でブレイズとの今までの記憶を思い返す。

——やっぱり、おかしい…。

「ねえ、ブレイズ」

「何でしょう？」

「あなた、どうして私の名前を知ってるの？」

顔を隠していた手を下し、まっすぐにブレイズの真紅の瞳を見つめる。

どう思い返しても出会ってから今までの短い間に、彼に名前を教えた記憶はない。

なのに彼はさつき確かに私の名前を言った。

「大丈夫ですかアリス？」と――…

「僕の名前はブレイズ。あなたの案内人。…この「緋月の国」へのね」

真紅の瞳が爛々とした輝きを放つ。

さつきまでのルビーのような美しい輝きとはどこか違う輝きだ。

異様なくらい明るくて、怖いくらい強い輝き。

それはまるで――…

「…「緋月の国」？」

「そう。この「緋月の国」へあなたを案内して来たのは僕。あなたを「緋い月夜のお茶会」に招待したのも僕」

「何を言ってるの…？意味が分からないわ。それに私の質問は、どうしてあなたが言ったはずのない私の名前を知っているかということよ。…答えになってないわ」

獲物を追いつめるハンターのような瞳の輝きと薄い微笑み。

好きなだけいたぶって、怯えさせて、力の限りに逃げさせて。
淡い希望の光を見た瞬間に待ってましたと言わんばかりに捕まえる。
その時ハンターが獲物に向ける顔と今のブレイズの顔はそっくりだ。
追いつめられ絶望の淵に立った獲物を見るのが楽しくて、そんな獲物
を捕まえていることが嬉しくて、そしてそれらの湧き上がる自身の
感情に興奮して…

純粹に狂っていつてしまうハンターが見せる狂気が彼の瞳と微笑みに
浮かんでいた。

「答えならアリスあなた自身が知っているはずさどうして僕があなたの名前を知っているかそれにどうして記憶がないのかもどうして棺桶の中に眠っていたのかも全部全部あなたは知っているんだよ思い出せないはずはないよあなたの記憶は消したんじゃないって眠らせただけなんだからあなたがそうしてほしいといったからそうしたんだ僕は嫌だったけどあなたがどうしてもって泣くから記憶を眠らせることにしたんだから思い出してよアリスまた一緒に「緋い月夜のお茶会」をしようよずっとずっと僕と一緒にいよう誰にも渡さないあなたは僕だけのもの僕だけのものなんだよねえ僕のことを思い出してよ忘れるなんて許さない絶対に許さない思い出して僕のことを……………」

さっきまでの丁寧な喋り方はかなぐり捨てられ、頭を両手で抱えながら狂ったように脈絡もなくブレイズは叫ぶようにしてそう言った。

「ブ、ブレイズ…どうしたっていうの…？」

恐くて恐くてたまらなかった。

目の前で突然狂い出した白兔にただただ怯えているしかなかった。

恐怖で凍りついた足は一步も動かせず、呼吸をするのさえ難しい。恐いのにな、逃げることもすらできないのだ。

「…思い出してよアリス。僕のブレイズって名前だってあなたがつけたんだよ？」

叫び疲れたのか、静かになったブレイズはそう言いながらゆっくりと近づいてくる。

もともとそう離れた距離にいたわけじゃないので二、三步近寄っただけですぐ目の前に立たれてしまった。

相変わらず、私の足は動かない。

「耳を触らせてって、初めて会ったあの日にも言ってた…。さっきみたいに夢中で触られて僕は感じちゃって、それ見てアリスが顔を真っ赤にして…。同じだよ。さっきと同じ。あなたはあの日から何も変わってない」

「…分からないわ。思い出せないのよ。あなたとは今日会ったばかり…」

「違う！！僕達はずっとずっと前に出会ってる！！」

心の奥底ではブレイズの言葉は正しいと思っていた。
初めて会ったはずなのにあんなにも懐かしいと思ったのだから。
本当は今日が初めての出会いじゃないとそう感じた。

でも、記憶がないのだ。

いくら心が懐かしがっていても、肝心の懐かしく思う記憶がない。
それではひどく不完全なのだ。

思いがあっても記憶がなくては、記憶があっても思いがなくては、
何を言われてもどこか幻のように儚く頼りないものなのだ。

「思い出して、アリス」

細くて長い綺麗な指に顎を掴まれ、上を向かされる。

悲しげに揺らめく真紅の瞳に見つめられ、胸が苦しくなる。

さっきまでの狂気で輝いていたものとは違って、ほんの少し安堵した。

「僕の名前はブレイズだ」

真紅の瞳に真っ直ぐと見つめられながらそう言われた瞬間、頭の中で不意にある映像が浮かびあがった。

* * * * *

小高い丘の上に生える一本の大きな木。

辺りは青々とした草と色とりどりの花が咲いている。

その中で真紅の瞳をした色白の美少年がじっとこちらを見つめている。

『あなたの名前はブレイズよ』

自分の声がどこから聞こえた。
とても楽しげな明るい声だ。

『ブレイズ？』

真紅の瞳の少年は問いかけるように首を傾げながらそう言った。
とても愛らしい仕草で思わず抱きしめたくなった。

『そう。blaze——ブレイズよ。強い輝き、まぶしい輝きって
いう意味よ』

『輝き？』

『そうよ。あなたの瞳ってとっても綺麗に輝いているんだもの。それ
にあなたは私を退屈という闇から照らしてくれた輝きじゃない』

い！！！！！』

『blaze——ブレイズ…輝き。…ありがとう、すごく嬉しい』

キラキラと真紅の瞳を輝かせ笑う少年につられてこちらまで嬉しくなった。

やっぱりブレイズという名前にしてよかった、とルビーのように綺麗に輝く真紅の瞳を見て思った。

『僕の名前はブレイズだ！』

そう言って、無邪気に笑いながら少年は私を抱きしめた——…

* * * * *

「アリス…」

気が付くと、私はブレイズに抱きしめられていた。

後ろから抱きしめられた時よりも彼は強く私を抱きしめていた。少し苦しいくらいに。

「ブレイズ…？」

今のは幻だったのだろうか？

でもそれにしてはやけに鮮明だった。

それに、ブレイズと名付けられた少年は、今目の前にいるブレイズを幼くしたらそっくりだ。

「…夢なんかじゃない」

さっきのはきつと私の記憶だ。

短すぎてまだ頼りない記憶だけれど私にとってはかけがえのないもの。

やっぱり、私はブレイズ出会っていたのだ。

記憶の中のブレイズはとても無邪気で明るい子だった。

心の奥底から湧き上がるブレイズへの懐かしさは純粹な思いだった。そう、きっとブレイズは私にとって大切な人だった…。

——— だけど、どうしてだろう…。

思い出した記憶に、何故だか泣きたくなるほどの悲しみを感じる。

心の奥底からは懐かしさと同じくらいの恐怖が湧き上がってくる。

——私、この人の腕の中から逃げ出したいと思ってる…。

凍りついた足はまだ動かない。

【chapter?】 who are you? (後書き)

こんにちは、作者の桐龍朱音です！

へたくソな文章ですが最後までお付き合い下さると嬉しいです！！

今回からキャラクター紹介を載せようと思いますのでよかったらご覧ください。

キャラクターその1

【名前】アリス・リデル

【性別】女

【年齢】16歳

【容姿】細身で背は小さく、腰まで伸びた髪は金色、瞳は水底のように深く透き通った青色、肌は病的なまでに白く、顔立ちは愛らしい無自覚の美少女。

【服装】白いエプロンドレス、レースの付いた白い靴下、白いショートブーツに白いリボンを頭につけているといった白づくめ。おそらく下着も白…。

【持ち物】首から下げた小さくて丸い緋色のペンダント

【性格】本来は明るく好奇心旺盛な自由人。でも今は記憶がないためちょっと暗め。怒るとけっこう恐いらしい。

【chapter?】 I, m... (1)

あの日、あなたは僕に言ったんだ。

『あなたは私を退屈という闇から照らしだしてくれた輝き』と。

ねえ、それなら永遠にあなただけを照らし続ける『輝き』でいるから。

どんな闇の中でさえも必ずあなたを見つけ出してみせるから。

だからお願い。

ずっとずっと僕のそばにいて。

絶対に絶対に離れないで。

そして――

どうか、僕を愛して下さい。

* * * * *

——アリス、アリス、アリス!!!

愛しき少女の名前を心の中で叫びながら薔薇の中を走り抜ける。

白、黄色、青色、紫、ピンク、黒…それぞれの色の薔薇園を走り抜けて、目指しているのは「純白の宮殿」。

魔法を使えば一瞬で行けるけれど、僕はあえて走って行くことを選んだ。

走るといふその行動が、僕のアリスを思っ逸る心にどこか似ていたから。

——もっと、もっと速く!!!

僕はこの国で最速の足と、どんなに走っても疲れない体を持っている。

だからどれほど速いスピードで走ろうと、息切れすることも疲れることもない。

やろうと思えば風のようにどこまでも速くなれるのだ。

——なんだか息がうまく吸えなくて苦しい…。

けれど僕は今、息を切らして苦しさに呻いていた。

もちろんそれは走っているからでも、疲れているからでもない。
そんなのはあり得ないことだ。

——…アリス、アリス、アリス！！！！

だとしたら僕がこんなにも苦しくなっている理由はたった一つ。
アリスに会えるという興奮のせいで鼓動が異常なくらい速くなっているからだろう。

——これ、鬱陶しいな…。

軽い舌打ちをしながら、走る度に胸の上でぶらぶらと激しく揺れていた銀時計を掴むと、勢いよく首から外してズボンのポケットに乱暴に突っ込む。

大事な時計だけれどこの一大事には邪魔なものでしかなかった。

——アリス、アリス、アリス！！！！

僕は走る。

風よりも速く、嵐よりも荒々しく。

アリス、あなたに会いたいその一心で。

「アリス！！！！」

叫んだのと同時に白く丸い建物が見えた。

「白薔薇の茶会場」から走り出て二、三分経ったくらいだろうか。僕はようやく「純白の宮殿」に辿りついたのだ。

ここまでの道のりは時間に見ればごく短いものだったけれど、アリスを求めるこの気持ちのせいで、まるで永遠にも思えるほど長く感じた距離だった。

「…やっと会えるね、アリス」

真っ白な扉をゆっくりと開き中に入る。

中央にある舞台のような「儀式の間」も、その丸い淵にそって流れるようにして広がっている数段の階段も、「儀式の間」と階段をぐるりと取り囲むようにして円形に広がる「祈りの席」も、さらには壁も床も天井もすべてが白一色で統一されている。

アリスが眠る大きな赤い十字架が描かれた「漆黒の棺桶」とそこに巻きつく銀の鎖、「儀式の間」の真上にある七色のステンドグラスだけが鮮やかな色を持っていた。

一歩、一歩、歩を進める度に、汚れ一つなく磨き上げられた床が高らかな音を立てる。

その音は丸いこの建物の中に波紋のように響き渡っては反響し、一種の音楽のようになっていた。

それ以外の音は一切聞こえない。

——時は満ちたよ、アリス。

階段を上り、棺桶にそつと触れる。

ステンドガラスを通して七色に漏れこむ空の光のせいか、棺桶は温かくなっていた。

まるでそれが目覚めるアリスの体温を教えてくれているようで、自然と顔が緩んだ。

どんな些細なこともすべてアリスの目覚めと繋げて考えてしまう癖がついていた。

——さあ、起きてアリス。

触れている手から棺桶に魔力を流し込むと、数センチ浮かび上がった。

魔力を流し込んだ手と反対の手の親指を思いつきり噛んで、血を流す。

そして流れ出た赤い血を棺桶の上の方に描かれた赤い大きな十字架にたらしめた。

するとまるで飲みこむかのように十字架が勢いよくその血を吸収していった。

そしてたらされた血に満足したように十字架がヌラヌラと生々しく輝き始めると、ガチャリと音を立てて棺桶にがんじがらめに巻きついていて銀の鎖が外れ落ちた。

落ちた鎖は蛇のように棺桶の横に移動するとそこで力を失ったように動きを止めた。

それを見届けてから手を離すと、棺桶の蓋が独りでに開いて鎖のそばにゆっくりと降りていった。

次いで棺桶自体も静かに床に降りた。

「ああ、アリス!!!」

開けられた棺桶の中を勢いよく覗き込むと、そこには長い間待ち続けた愛しき少女、アリスが眠っていた。

胸の上で手を組み、艶やかな長い金髪に包まれるようにして横たわる彼女は神々しいほどに美しかった。

雪のように真っ白であるはずの彼女が身につけているエプロンドレス、靴下、ショートブーツ、リボン、さらにはそれらに包まれている彼女の肌はステンドグラスから漏れこむ光に照らされて今は七色が混ざり合った幻想的な色に輝いていた。

悪夢にでも魘されていたのか、美しい顔を微かに歪めてはいるものの、作り物のように完璧な美しさを誇るアリスの姿に、思わず溜息が零れていた。

「相変わらずあなたは美しいね…」

この建物と同じ、純白に包まれたアリス。

白さは彼女の美しさをより惹きたてる。

僕はそれをよく知っているのだ。

だからこそ眠りにつく前の彼女に僕は白いものを身につけさせた。

——だって、赤い血は白によく映えるものね…。

「…っあ…!？」

そう思った瞬間、500年前のあの日の記憶の断片が脳裏に蘇った。

漆黒の闇夜を照らす緋い満月。

吐き気を誘うほど甘ったるく粘着質な囁き声。

赤い血を白い肌に飛び散らせ、狂った少女の姿。

蘇る、蘇る、蘇る。

血に塗れ狂いの笑顔を咲かせた少女に抱いた感情が。

我に返って悲痛の涙を流した少女に抱いた感情が。

少女の肌より純白で飛び散る血よりも鮮やかだった感情が。

蘇る、蘇る、蘇る。

零れた紅茶に浮かぶ少女の絶望。

砕け散った鏡に映る僕の嗤い顔。

ああ、蘇る——…。

「…ッアアアア!」

頭を両腕で抱えてさらに鮮やかに蘇ろうとする記憶を押しとどめる。
アリスを待ち続けていたこの500年間、ずっと頭の中にあった記憶。

いつもは喜んでその記憶の中に沈んでいった。

けれど今はアリスを目覚めさせなければいけないのだからそう
なっ
てはいけない。

記憶に沈んで我を忘れてしまっ
てはいけない。

「アリス…」

まだ眠ったままの愛しき少女に呼びかける。

もう目覚めてもいいはずだ。

もう眠りの時は終わったのだから。

「アリス…」

お願いだから目を覚まして。

水底のように深く透き通った青い瞳で僕を見つめて。

凜とよく響くその声で僕の名前を呼んで。

「アリス…」

あの日の記憶が再び僕を呑み込もうとする。
もう抑えがきかなくなってきたのだ。
さっきの記憶の続きが、頭に流れ出す…。

「アリス…目を覚まして？」

記憶はいともたやすく僕を呑みこみ狂わせる。
そうなることは僕の本望ではあるけれど、今ここでそうなんてはいけないのだ。

呑みこまれ狂ってしまえば、アリス、僕はあなたを——…

「アリス、目を覚まさないで殺されちゃうよ？」

お願いだから目を覚まして、アリス。

この僕があの日のようにまたあなたを殺してしまうその前に。

——アリス、目を覚まして…

【chapter?】 I , m … (1) (後書き)

これから二、三話ほど『who are you?』の時の白兔
ブレイズの心境を書いていきたいと思います。

ブレイズは少し狂い気味の子なので文章がごちゃごちゃしていて脈
絡のない部分があるかもしれませんが…。

単純に私の文章力が稚拙なせいでもあるのですが…。

まあ、そんなこんなでストーリーもあまり進まずまどろっこしい『
I , m …』の話ではありますが、ちよつとづつ過去も明らかにして
いくのでぜひお付き合いください。

ちなみに白兔ブレイズのキャラ紹介は『I , m …』の話の最後に載
せたいと思います。

【chapter?】 I , m … (2)

「純白の宮殿」から走り去る途中、僕の意識は完全にあの日の記憶に飲み込まれた――…

* * * * *

『いやああああああああああああっ！！！！』

僕が告げた真実にアリスは絶望の叫び声を上げた。

華奢な体を震わせ、彼女は体の奥底から叫んでいるようだった。

まるでそうすることでこの現実から逃れられるとでもいうように。

『嘘よ！！こんなの夢だわ！！！！こんなっ…こんなこと私がしたなんて…！！！！』

『嘘でも夢でもないよ、アリス』

さあ、その綺麗な青い瞳で周りをよく見てごらん。
あなたは受け入れなければならないんだ。
目の前に広がる現実を。
逃れられない真実を。

『君が皆をナイフで刺したんだ』

『いや、いや、いや！！』

そんなに首を振ったって、この現実を拒否することはできないよ。
それは紛れもなくあなたが作り出したものだから。

『嘘よ、嘘よ、絶対に嘘よっ！！』

大きな青い瞳からキラキラと零れおちる涙の宝石。
雪のように白い肌に咲く鮮血の花。
絶望に歪むビスクドールのように綺麗な顔。

先ほどまでの殺戮を繰り返す狂ったアリスは赤薔薇のように艶やかな美しさをしていただけで、今目の前で絶望に震えるアリスは白薔薇のように儚い美しさをしている。
僕はどちらのアリスも素敵だと思うのだけれど、彼女自信はそんな

自分の美しさに気が付いていないようだ。
何て勿体ないんだろう。

『本当だよ、アリス。だってあなたの手には今でも皆を刺したナイフが握られているじゃないか』

僕の言葉にアリスは弾かれたようにして自分の手を見る。

血に染まった優美な手には、同じく血に染まった小さなナイフがしっかりと握りしめられていた。

『あ…ああ…そんな…そんな…！』

ナイフを投げだし、血に染まった手を茫然と眺めながらアリスは震えていた。

その様子からして、どうやら今までナイフを握っていたことに気が付いていなかったようだ。

よほどシヨックだったのか、叫ぶこともできずにただ俯いて小さな呻き声を上げている。

『ほらね。嘘じゃなかったでしょ？君が皆を殺したんだ』

『あ…あ…あ…ああ…』

もっともっと絶望してよ、アリス。

そのために僕はあなたに悲惨な真実を語り続けているのだから。

『忘れたい、アリス？この悲惨な現実を』

泣いて、叫んで、絶望して。

そして気がついてよ。

僕に縋るしかないってことに。

『わ…す…れ…る…？』

俯いたままそう呟いた彼女を僕は後ろから優しく抱きしめる。

そして彼女の耳元で囁いた。

甘い甘い誘惑の言葉を。

『そう。僕はね、目の前に広がるこの現実を、あなたの心の奥底に眠らせて忘れさせることができるんだ』

鮮血に塗れた無言の人々。

割れた食器に零れた紅茶。

赤い薔薇達は無残に散らされ、踏みにじられて。

緋い月が禍々しく輝いている。

そんな血塗られた現実を忘れたいかい、アリス？

『あなたが望むなら僕は喜んで忘れさせてあげるよ』

ここまで事はすべて僕の思惑通りに進んだ。

あとはアリスの記憶から僕のこと以外を忘れさせるだけ。
けれどそのために施す魔法はアリス自身が「忘れない」という意思を持たないと成功しない。

『忘れてしまえばもう苦しまなくていいんだよ?』

だから忘れたいと強く願ってよ、アリス。
その愛らしい唇と声で僕に縋って。
あなたにはもう、僕しかいないんだよ?

『わ…すれ…たい…』

いい子だね、アリス——…

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

気が付くと、目の前に青い空が広がっていた。

つまり、僕は地面に寝転がっていることになる。

体中に鋭い痛みが走っているのと、むせ返るような甘ったるい匂いがしていることを考えると、どうやら僕は薔薇園の中にいるらしい。どうしてこんな状況になっているのかと、まだ少しぼんやりとすると頭で考えを巡らす。

「気が付いたの？白兔」

「その声は…女王陛下？」

姿は見えずとも辺りから響く威厳と気品に満ち溢れたよく通る声。この国でこんな声をしているのは女王陛下だけだ。

「…あの、僕はどうしてこんな所に寝転んでいるんでしょうか？」

「お前はまたあの日の記憶に狂わされて、この「赤薔薇の園」で暴れていたのよ。それで私が魔法で薔薇を操ってお前を捕らえたの。まったく、私の大事な薔薇達をこんなにめっちゃくちやにしてくれちゃって」

「…申し訳ありません」

「まあ、いいわ。お前は私のお気に入りだしね。…それに、あの日

の記憶は…私でさえも時たま狂わされる…。仕方のないことよ…」

「陛下…」

「処罰はしないけど、暫くそうして頭を冷やしてもらっわ。無理に動かないほうが身のためよ？お前の体は薔薇の蔓で捕えたからね。時間が経てば自然に解ける魔法だから」

「御意…」

そうか。

全身に走る鋭い痛みは薔薇の棘のせいか。

この痛みのおかげで徐々に意識がはつきりしてきている。けど、不快でしかたない。

「そう言えば、アリスが「目覚め」たそうね？」

女王陛下の気配は薄れつつあったが、思い出したような言葉とともにその気配が少しだけ強くなった。

「ええ…」

僕しか知らないはずのアリスの「目覚め」のことを女王陛下がすでに知っているなんて驚きだ。

一体、何処からその情報を得たのか…。

—— ああ、そう言えばアイツもアリスの「目覚め」を知ることができたっけ…。

頭の隅にチラつくピンクと紫のオッドアイ。

この国において彼に隠しておける情報など何一つないのだ。
彼はあらゆる世界に精通するこの国の「情報屋」だから。

—— きつと陛下にアリスの「目覚め」を教えたのもアイツだろう。
チツ、忌々しい奴だ…。

「そう。それなら早く城へ連れてきてちょうだい。…あの日失敗した「儀式」を今度こそ完全に成功させなきゃいけないわ」

「…御意」

僕が返事をしたのと同時に、女王陛下の気配が完全に消えた。
それを確認してから僕は溜息とともに目を閉じた。

—— アリス…。

眼裏の闇の中に微笑むアリスの姿が浮かび上がる。
何よりも、誰よりも、大切に愛しいアリス。

——アリス…。

眼を開けて、小さな声で呪文を唱える。
すると体中を縛り付けていた薔薇達が一斉に僕の体から離れ、そして焼け焦げた。
灰になり散っていく嘗ては美しかった薔薇達。
今は何と醜いのだろう。

「ふん、これしきの魔法で僕を捕らえておこうだなんて笑っちゃうね」

この国で一番魔力があるのはこの僕だ。
普段は隠しているから気づいている奴なんていないだろうけど。

——いや、アイツは知ってるかもな。

何てったって、彼は忌々しいほど有能な僕の友達だもの。

【chapter?】 I, m... (2) (後書き)

この『I, m...』の話はあと一話で終わる予定です。

今回はほんの少し過去を明らかにしてみましたがいかがだったでしょうか？

あんまり素敵な過去じゃなかったですね…（-_-;）

この『I, m...』の話が終わりましたら、物語は進みます。

今回ちらほら出てきた「アイツ」も姿を現す予定です！

個人的には「アイツ」大好きなので早く出したいくてうずうずしております。

まだまだ未熟なので感想やご指摘など頂けるととてもありがたいです。

泣いて喜びます！！笑（↑マジですよ！）

この作品ではないのですが、私が前に書いた「私の方が狂っている」という短編の方で感想をくださった方がおりました！

この作品を見て下さってるか分かりませんが、本当にありがとうございます！！

泣いて喜んでます！

【Chapter?】 I, m... (3)

——さあ、早くアリスを迎えに行かなくちゃ。

「アイツ」がアリスの目覚めのことを知っているとしたら、確実に彼女のもとへと向かうだろう。
アリスは僕だけじゃなくこの国の住人すべてが欲している存在なのだから。

——だけどアリスは誰にも渡さない。

彼女を最初に見つけ、欲し、そしてこの国に連れて来たのは紛れもなくこの僕だ。
そんな僕を差し置いて他の誰かがアリスを手にするなんてそんな理不尽なことあつてたまるか。
彼女は僕だけのものなのだ。
それを邪魔する奴がいれば、例えば女王陛下だろうと友達だろうと容赦なく殺す。

——さて、今回は急いでいるから移動魔法で行くか。

左手の手の甲に刻まれた緋い扉の形の刺青にキスを落とす。
辺りが緋い光に包まれて、目の前に手の甲に刻まれた刺青と同じ緋色の扉が現れた。
僕はアリスの姿を思い浮かべながらその緋色の扉をゆっくりと通り抜けた。

* * * * *

緋色の扉を通り抜けると、目の前に「純白の宮殿」があつた。
時間にしてほんの一瞬。
走ってきて二、三分で着くし、疲れることはないのだけれど、やっぱりこっちの方が断然早いし気分的に楽だ。

—— ああ、アリス。ようやく目覚めているあなたに会えるんだね…

白い手袋を両手にはめて、急く心を押さえながら扉へと近づき、そして開く。

真っ白なその扉の向こうに広がっていたのは真っ白な世界。
けれど、「儀式の間」へと続く道の途中に見事な金髪をした少女が一人。

彼女はこちらに背を向けていてその顔は見えないが、誰かなんて分かりきっている。

この「純白の宮殿」にいるのも、一目見ただけで僕の心を震わせることができるのもたった一人だけだから。

「ああ、アリス。会いたかった…！」

少女に駆けより、その華奢な体を抱きしめる。

500年ぶりの彼女の温もりと、甘い花のような香り。

記憶の中のものよりも確かなそれらに、彼女は本物なのだと実感させられる。

「あなたが眠りについた500年前からずっとこの日を待っていたんだよ…？」

そう。

ずっとずっと待ち続けていた。

あなたが目覚める今日というこの日を。

「Let's give a tea ceremony with me？」

さあ、愛しいアリス。

あなたが狂い、あなたが絶望し、そしてあなたが僕だけのものになるはずだったあの「緋い月夜のお茶会」の続きを僕と一緒にしましょう？

——今度こそ、あなたは僕だけのもの……

「……あなたは誰？」

小さいけれど凜と透き通った心地よい声。
ずっと聞きたいと思っていた愛しい愛しい声。
けれどその声が発した言葉に僕は衝撃を受けた。

——僕のことを覚えていない……？

混乱する頭で何とか考えを巡らせ記憶を呼び起こす。

いつも思い出す記憶は僕が見たいと思ういわば「お気に入り」の記憶だけだからその他の細かい記憶や思い出したくない「忌まわしい記憶」は忘れ気味だ。

特に愛しいアリスを眠りにつかせた時の記憶なんかは、僕にとって「忌まわしい記憶」に他ならなかった。

「ああ、そうでしたね。「再生の眠り」につくとすべての記憶を忘れるようにたんでしたっけ」

やっとなさ思い出したアリスを眠りにつかせたときの「忌まわしい記憶」。

確かに僕は彼女の記憶の全てを眠らせ、忘れさせた。

本当は僕のことだけは覚えておくようにしたかったんだけど…。

「あなたは誰？」

さつきよりも大きくしつかりした声でアリスに問いかけられる。

その声に初めて出会った時の彼女の姿が蘇る。

好奇心に青い瞳を煌めかせ、愛らしい顔に満面の笑みを浮かべ、凜と透き通ったしつかりした声で僕に話しかけてきた遠い昔のアリス。僕はあれから長い時を過ごしてこの場にいるけれど、あなたは眠りについた日のままこの場にいる。

——すべてを記憶して今日まで生きてきたのと、すべてを忘れて今日まで眠っていたのと果たしてどちらが本当に罪深いことなんだろうね、アリス？

「ああ、すみません。自己紹介もせずいきなり抱きしめてしまつて」

アリスから一度離れて、彼女の正面に回る。

とりあえず、彼女の記憶が眠ってしまっているのなら再びその記憶が蘇るまで初対面として接した方がいいのだろう。

「僕は白兔のブレイズ。あなたの案内人です」

サファイアよりも深く輝く青い大きな瞳。

眩いほど白くキメの細かい肌。

すらりと通った鼻筋に、瑞々しい果実のように潤った唇。

腰のあたりまで流れ落ちる光の洪水のような真っ直ぐな金髪。

正面から見た彼女は記憶の中よりも、そして先ほど覗いた時に見た眠る彼女の姿よりも美しかった。

何よりもちゃんと僕が存在や言葉をちゃんと認識して、答えてくれるのが嬉しかった。

記憶の中の彼女も眠っている彼女も、そんなことではしなかったから。

「ねえ、その頭に生えてる耳って…本物？」

アリスの青い視線が僕の頭の上らへんで釘付けになっている。そう言えば、彼女の世界には半獣人なんてのはいなかった。

この「緋月の国」に来てからの記憶はすべて眠らせたけれど、その前の彼女の世界の記憶は眠らせていない。

長い眠りのせいでその記憶も少々曖昧になっているかもしれないけれど、じきに思い出さだろうし、なにより故郷の「常識」というものはなかなか忘れないものなのだろう。

その「常識」というものから考えたら僕の耳はさぞおかしなものに違いない。

初めて会った時の彼女も同じように興味を示していたし。

「ええ、本物ですよ」

「ほつ、本物！？」

その驚き方も、初めて会った時に本物の耳だと教えてあげた時のものとまったく同じだったので、僕は「はい」と答えながらもおかしくて思わず笑ってしまった。

「本物なら、ちょっと触らせてみてくれない…？」

一生懸命になってお願いしてくる彼女は本当に愛らしかった。まさに悩殺ものだ。

「あなたならいくらでも触っていいですよ」

小さなアリスに合わせて屈み、彼女が触りやすいようにする。
恐る恐る伸ばされた彼女の手が僕の耳を優しく撫でる。

最初は遠慮気味に触れていたけれど、次第にその触れ方が激しくな
っていく。

ちらりと彼女を見ると青い瞳を爛々と輝かせながらとろけそうなほ
ど満面な笑みを浮かべている。

それはとても素敵な…顔な…のだ…けれ…ど…。

「…っああー!!」

僕は我慢しきれず声を漏らしてしまった。

あまりに心地よい刺激に、呼吸は乱れ、頬が火照る。

アリスのために彼女が満足するまで我慢しようとは思ってたのだけ
れど…無理だった…。

「ちょっと、どうしたの!?!」

驚いた声と表情で覗き込んでくるアリス。

その姿も可愛い…。

「す…すみません。実はこの耳って一種の性感帯のように敏感で感じやすいんですよ…」

「え？あ、それは…ごめん」

「いえ…」

アリスがおずおずと顔を背けるのを残念に思いながらも、一刻も早く呼吸の乱れと体の火照りを元に戻そうと深く深呼吸をする。そうして暫くじっとしていると何とか元に戻った。ふと気が付くと、アリスがこちらを赤い顔でじっと見ていた。

「大丈夫ですかアリス？何だか顔が赤いようですけど…？」

「だ、大丈夫！！気にしないで！！」

顔を隠しながら後ずさろうとした彼女は、不意にその動きを止めた。あまりにも急なその動きに訝しく思っていると、しばらく間を開けてから顔を隠していた手を下しつつ彼女が問うてきた。

「ねえ、ブレイズ」

「何でしょう？」

「あなた、どうして私の名前を知ってるの？」

強い意志を灯した青い瞳が僕の瞳を射抜く。

僕としたことが墓穴を掘ってしまったらしい。

そう言えば僕はまだ彼女の口から名前を聞いていない。

初対面のふりをするならばまず真つ先に彼女の名前を尋ねるべきだったのに、それを忘れていた。

——でも、そもそも初対面のふりをする事自体が間違っているんだ……

僕は彼女を500年以上前から知っている。

彼女だって本当は500年以上前から僕を知っている。

だって、僕達は——……

「僕の名前はブレイズ。あなたの案内人。……この「緋月の国」へのね」

「……「緋月の国」？」

「そう。この「緋月の国」へあなたを案内して来たのは僕。あなたを「緋い月夜のお茶会」に招待したのも僕」

僕達は初めて会ったその日から互いが互いの存在を求めあった。

僕の乾いた孤独をあなたが埋め、あなたの果てのない退屈を僕が埋めた。

僕にはあなたが、あなたには僕が必要なんだ。
あなたは僕のもので、僕はあなたのものなんだ。
だから記憶を眠らせたからといって忘れるはずないんだ。
僕達は互いの存在なしでは生きられないから。

「何を言ってるの…？意味が分からないわ。それに私の質問は、どうしてあなたが言っただけなの？私の名前を知ってるのかということよ。…答えになってないわ」

アリスのその言葉に僕の中で何かが弾けた。
どうして、どうして僕は覚えているのに彼女は覚えていない？

「答えならあなた自身が知っているはずさどうして僕があなたの名前を知っているかそれにどうして記憶がないのかもどうして棺桶の中に眠っていたのかも全部全部あなたは知っているんだよ思い出せないはずはないよあなたの記憶は消したんじゃないやなくて眠らせただけなんだからあなたがそうしてほしいといったからそうしたんだ僕は嫌だったけどあなたがどうしてもって泣くから記憶を眠らせることにしたんだ」
「だ」から思い出してよアリスまた一緒に「緋い月夜のお茶会」をしようよずっと僕と一緒にいよう誰にも渡さないあなた僕だけのもの僕だけのものなんだよね僕のことを思い出してよ忘れるなんて許さない絶対に許さない思いだしてよ僕のことを！！！！！！！！！！」

頭を両手で抱えて僕は叫んだ。
そうしないと自分でも手に負えないほどおかしくなってしまうそう

だったから。

「ブ、ブレイズ…どうしたっていうの…？」

震えるアリスの声が静かに耳に響く。

ああ、あなただけは僕の存在に怯えさせられなかったのに。
どうしていつもあなたに関して上手くないんだろう？

「…思い出してよアリス。僕のブレイズって名前だってあなたがつけたんだよ？」

これ以上怯えさせないように、ゆっくり静かにアリスへと近づいて行く。

大きく見開かれた青い瞳で僕を見つめながら、彼女は凍りついたように動かない。

「耳を触らせてって、初めて会ったあの日にも言ってた…。さっきみたいに夢中で触られて僕は感じちゃって、それ見てアリスが顔を真っ赤にして…。同じだよ。さっきと同じ。あなたはあの日から何も変わってない」

「…分からないわ。思い出せないのよ。あなたとは今日会ったばかり…」

「違う！！僕達はずっと前に出会ってる！！！」

僕の魔力は強大だ。

その僕の魔力によってどこされた魔法がそう簡単に破れるものではないということは、この僕が一番よく分かっているし、アリスにその魔力を破って思い出してほしいというのがいかに理不尽なことかもよく分かっている。

だからこそ最初は徐々に思い出してくれればいいと思った。

魔法が薄れていくのに合わせて思い出してくれるのを待とうと。

でも、この少しの間アリスの側にただでそんな考えはどこかへ行ってしまった。

愛しい人が自分を覚えていないということがどんなに辛いことか痛感したのだ。

ちゃんと僕という存在を見てくれてはいるけれど、そこには何の想いもない。

嘗て向けられた愛も、慈しみも、そして悲しみや怒りさえも。

何一つとして無いのだ。

それをすべて覚えている僕にとってアリスが僕を思い出せない状況は苦痛以外のなにものでもない。

愛しいからこそ苦しくて苦しく、堪らないのだ。

「思い出して、アリス」

アリスの細い顎を持ち上げて、僕の視線と合わせる。

ほんのり潤んだ大きな瞳は、怯えではなく深い深い苦しみの青色に染まっている。

先ほどよりは怯えていないその顔に少しだけ安堵する。

「僕の名前はブレイズだ」

真っ直ぐに見つめてそう言うと、アリスの瞳が大きく見開かれた。そしてそのまま動かなくなってしまった。僕を見ているはずなのに、僕を通して別の何かを見ているかのようだ。

「アリス…」

僕は強くアリスを抱きしめる。

心地よい体温、甘い花のような香り。

アリスは確かにここににいるのに、何よりも手に入れない心の距離は果てしなく遠い。

けれど、それでも手放せない愛しい人。

「アリス…」

「ブレイズ…？」

何度目かの呼びかけの後、アリスが僕の名を呼んだ。何処か寝起きのようなぼんやりとした声だ。

「…夢なんかじゃない」

アリスの不思議な呟きが、耳を擦った。

何の事だかさっぱりわからないけれど、今はどうでもいい。

——アリスが僕の腕の中にいるという事実以外は…

そう、アリスは今ちゃんと僕のそばにいるのだ。

急ぐことなんてない。

アリスに施した記憶を眠らす魔法はアリスの「目覚め」とともに徐々に溶けていくようにしてあるのだから、一緒にいればきっとすぐに思い出してくれる。

本当は今すぐにでも思い出してほしくて仕方がない。

僕だけが嘗ての日々を覚えているのが苦しくてしょうがない。

アリスの想いが欲しくて欲しくてたまらない。

——我慢するんだ。今までだって500年も我慢し続けたじゃないか。

そうだ。

今までアリスが眠っていた500年間に比べれば、きっと圧倒的に短い我慢だ。

何よりアリスは今目覚めているのだ。
目覚めて、ちゃんと僕を見ていてくれる。
それだけで今はいいじゃないか――…

「お取り込み中すみませんけどー、俺さ、人のラブシーンって嫌いなんだよね」

アリスの声じゃない、忌々しい声が背後から聞こえた。
カツン、という足音も聞こえる。

「まあ、俺も混ぜてくれるって言うなら話は別だけど？」

アリスを背に庇うようにして後ろを振り返る。
そこには思い描いた通りの、今一番会いたくない奴がいた。

「でもさ、できればアリスと二人っきりがいいよねー。そう思わない、白兔？」

異世界にも精通するこの国一の有能な情報屋。
最高に忌々しくて、大っ嫌いな僕の友達。

「こんなところで会うなんて奇遇だねえ、チエシャ猫？」

僕の言葉に、あははっ、とさもおかしそくに額に手を当てながら笑うチエシャ猫。

ピンクと紫の縞模様の尻尾がゆらゆらと揺れている。

「奇遇？そんなわけないでしょ、白兔」

尻尾と同じ縞模様の耳がぴくりと動いて、額に当てていた手がどこかされる。

ほんの一瞬、紫色にピンクのメッシュが入った髪の間隙から鋭い光が走る。

「必然だよ。アリスを奪い合っつていう…ね？」

猫は笑う。

金色混じりのピンクと紫のオッドアイを細めながら。

【chapter?】 I , m … (3) (後書き)

これで『I , m …』の話は終わりになります。

次回からはアリス視点に戻り、物語が進みます。

今回の最後の方に登場したチェシヤ猫がこれから活躍していく予定です。

それにしてもブレイズは矛盾の多い奴ですね…。

『I , m …』の話が終わったので、ブレイズのキャラ紹介を載せておきます。

キャラクターその2

【名前】白兎

【アリスからもらった名前】ブレイズ (blaze——燃えるような強い輝き、まばゆい光)

【性別】男

【外見年齢】17〜18歳くらい

【容姿】理知的な端正な顔立ちに雪のように真っ白な肌、特徴的な真紅の瞳に、白に近いさらさらの金髪、そして兎の耳と尻尾を生やした長身の美形。

【服装】チョッキと長ズボンとネクタイと皮靴はすべて黒、ワイシヤツと手袋は真っ白。

【持ち物】首から下げた銀色の懐中時計

【武器】黒い大きな鎌

【性格】目的のためなら手段を選ばない。基本的には冷静だが、一度狂うと手に負えない。快楽殺人者でもある。アリスと出会う前は優しくて穏やかな王子様のような子だったらしいが、アリスを愛してからには彼女以外の前では狂人と化すことが多くなった。

【chapter?】 intruder（前書き）

ほんの少し時間を巻き戻ってアリス視点で始まります。

【chapter?】 intruder

思い出した記憶とそこから抱いたブレイズへの想いに戸惑う私の数メートル先に、突然男が現れた。

何の前触れもなく、本当に唐突にその男は現れたのだ。

——これまたブレイズに負けないほどの美形ね…。

突然人が現れたらもつと驚くべきなのかもしれないけど、何故か私は冷静だった。

目を覚ましてから不思議なことの連続で、あんまり驚かなくなつたのかもしれない。

——ちょっと派手すぎるけど…。

ブレイズに抱きしめられたまま、しげしげとその姿を眺めながら、

そう思った。

何てったってその男の外見は…とにかく「目に毒だろ！」って思うくらいピンクと紫が目立つ姿なのだ。

瞳は金色混じりのピンクと紫のオッドアイ。

鼻筋の通った端正な顔に、皮肉そうな薄い唇。バランスのとれた体と長い手足。

髪は紫色の中にピンク色がメッシュのようになって入っている。

ゆったりめの黒い薄手の長袖シャツとズボンを着ているが、所々何故か破れていて無駄に露出度が高い。

長ズボンを包み込むようにして脛辺りまでのミドル丈のブーツを履いている。

——そしてやっぱり、耳が生えてる…。

ふわふわと柔らかそうな髪の上にぴょこんとあるのは紛れもなく猫耳だ。

おまけに背後にゆらゆらと揺れる尻尾も見える。

どちらもピンクと紫の縞模様だった。

——そう言えば、ブレイズも尻尾ってあるのかしら？

ブレイズに気がつかれないように慎重に視線を真下に落としてみると…

—— あつた…！

真っ白のふわふわの尻尾がちゃんとついていた。
見るからに触りご心地の良さそうな可愛い尻尾だ。

—— ブレイズは兎だけど、あの人は…猫、よね？

そう思いながら突然現れたド派手な猫耳男に視線を戻すと、どうやら彼もこっちを見ていたらしく視線が合ってしまった。
妖艶に光るピンクと紫のオッドアイに引き込まれそうな気がした。
ブレイズの真紅の瞳も綺麗だけど、この男の瞳もかなり魅力的だ。

—— あれ…？私…この瞳どこかで…？

男の瞳にブレイズと同様の強烈な懐かしさを感じたその瞬間、彼は
にやり、と笑みを零した。

…何だか危険な匂いのする笑い方なんですけど…！

「お取り込み中しませんけどー、俺さ、人のラブシーンって嫌いなんだよね」

ラブシーン…？

って、あつ、そうか…！

ブレイズに抱きしめられてるこの状況って世に言うラブシーンってやつだよね！？

ああ、どうしよう！！

今さらながら恥ずかしくなってきたよ！！！！

「まあ、俺も混ぜてくれるって言うなら話は別だけど？」

何言ってるんのあの人才！？

もしかして遊び人か？

見かけ通りの遊び人さんですか！？

私はまだ男の子とろくに付き合ったことない初な乙女なんですけど

！！！！

…いや、記憶がないから多分だけどね？

不意にブレイズが私を背に庇うようにして振り返った。

見上げたその顔は完璧な笑顔が浮かんでいたが、それはひどく冷たいものを感じた。

「でもさ、どうせならアリスと二人っきりがいいよねー。そう思わない、白兔？」

いやらしい笑みを浮かべながら男は話し続ける。
どうやらブレイズと知り合いのようだ。

——てゆうか、何で私の名前知ってるの…？

また、初対面の人が私の名前を知っているという不思議な状況。そしてブレイズに感じたのと同様の強烈な懐かしさが胸を締め付ける。

いや、今度は懐かしさというよりも…切なさに近い感情。

——何でこんな気持ち…誰なの、あなたは？

「こんなところで会うなんて奇遇だねえ、チェシャ猫？」

ブレイズの言葉にチェシャ猫と呼ばれたド派手な猫耳男があははっ、と額に手を当てながら笑った。

「奇遇？そんなわけないでしょ、白兔」

ぴたりと笑い声が止んで、チェシャ猫が額に当てていた手をどける。その瞬間、ほんの一瞬だけ覗いたチェシャ猫の瞳が鋭く光ったような気がした。

思わず、びくりと肩を震わせてしまった。

「必然だよ。アリスを奪い合っつていう…ね？」

金色混じりのピンクと紫の瞳を細めながら、猫は笑う。
挑発的に、そして少しだけ……本当にほんの少しだけ悲しそうに。

…って、ちょっと待ったああ!!!!

——私を…奪い合っつて言った!?

「なっ、何よそれ!？」

チエシヤ猫の突拍子もない言葉に、思わず大声を上げていた。
びつくりしたようなブレイズの視線と、おもしろがるようなチエシヤ猫の視線が一気に私に集まる。

「相変わらず元気がいいねえ、アリス？」

クスクスと笑いながらチエシヤ猫がゆつくりと近づいてくる。
ブレイズが表情を険しくして、チエシヤ猫を睨みながら、私を背中に完全に隠す。

おかげでブレイスの背中しか見えなくなってしまった。

「そうでなくちゃ、手に入れても面白くない」

「…それ以上近づくなよ、チエシヤ猫」

「おお、恐い。そんな顔をするなよ。俺達、友達だろう?」

「まあな、けど…」

突然辺りが赤く光った。

するといつの間にかブレイスの右手に大きな黒い鎌が握られていた。

「僕はお前が世界一忌々しくて大っ嫌いだよ！！！！！！」

「わお、ひつどい言葉！！」

その声とともに大きな鎌が思いつきり空を切る。

何やらものすごい突風が吹いて、轟音が辺りに轟いた。

——何が起こってるのおおお！？

「白兔、あんたの魔力はこの国で一番強力だ。でもね、誰にでも得意不得意ってものがあるんだよ」

轟音の隙間を縫うようにして、チェシャ猫の少し低めの色っぽい声が響く。

何処か楽しそうな歯切れのよい話し方をしている。

密やかな笑い声さえ聞こえる気がした。

——この状況で楽しんでるって、頭おかしいんじゃないの！？

「俺が得意とする魔法は気配を消して瞬時に移動する、瞬間魔法」

ふと、背後に気配を感じた。

振り向くと、そこには爛々と光るピンクと紫のオッドアイ。

端正な顔に満面の笑みを浮かべた、チェシャ猫の姿。

「きゃっ!?!」

「しまった!?!?!」

ブレイズがこちらに振り向くのと同時に、私は香水のような甘い匂いがするチェシャ猫に捕らわれた。
世に言う「お姫様だっこ」の状況で。

「この魔法では、君は俺に勝てない」

「アリス!?!」

ブレイズの必死の形相を最後に、私の視界は歪んだ。
チェシャ猫の甘い匂いに意識がどんどんと遠くなる。

「…久しぶりだな、アリス」

耳元で低く甘い声が囁く。

何故だか胸を締め付けるような切ない響きをしながら。

「あ…あなた…だ…れ…？」

かろうじて残っている意識で振り絞った声。
目の前は白く靄がかって、何も見えない。

「…今はおやすみ、アリス」

さっき目覚めたばかりなのにもう眠るの？
ああ、でも私本当ははずっと眠っていたかったの。
目覚めたくなんてなかったのよ…。

——あれ…？何で眠ってたかったなんて思うんだろう…？

私は「アリス」という名の女の子。
それ以外は何も分らないの。
何一つ分らないのよ。

自分のことも、懐かしく思うあなた達のことさえも。

——ねえ、誰か教えてよ…

「わたしはだれ…？」

「だ…」

チエシヤ猫が何か言ったようだったけれど、よく分からなかった。
私の意識は完全に途切れてしまったから。

【chapter?】 intruder（後書き）

ついにチエシャ猫完全登場です！

次回は気を失ったアリスが、夢の中でチエシャ猫との記憶を少し思い出すといった感じの話にする予定です。

アリスが徐々に元気になりつつあります（ツツコミなどで）。

元々、好奇心旺盛で明るい子なので、物語が進むごとにそんな感じになっていきます。

【chapter?】 sometime（前書き）

今回は気を失ったアリスが夢の中で見た過去の記憶の一部分のお話です。

【chapter?】 sometime

『終わりだよ、アリス』

漆黒の闇を照らす緋い月の光。
すべてが始まった時と同じ空模様。
皮肉なことにすべてが終わる時も同じ空模様。

『もう、お別れだ』

始まりは終わり。
終わりは始まり。
何かが始まったならそれはもう終わりに向かうしなくて。
何かが終わったならそこからは何かが始まるしなくて。

『少しの間だったけど、まあ楽しかったよ』

心は空洞となっているのに。
体は疲れ果ててボロボロなのに。
この終わりの先には何かが始まるのだろうか？

『今は欠片もあんに興味無いけどね』

意地悪く細められる金色混じりのピンクと紫のオッドアイ。

嘲るような、挑発しているような、歪んだ微笑み。

目の前にあるのは始まりの時も終わりの時も変わらない、いつもと同じ表情の猫の姿。

『どうして急に…』

乾いた喉から絞り出した声はびっくりするくらい小さくて。

迷い子の声のように哀れに震えてて。

まるで自分じゃない、他の誰かの声を聞いているようだった。

『そんなの飽きたからに決まってるでしょ』

いつも私の耳を優しく擦っていた低く甘い声が、冷たく残酷に私の耳に響き渡る。

聞きたくなくて耳を塞ごうとしても、凍りついたように体が動かない。

『俺は何にも執着しないし、誰にも縛られない。だから飽きたらそれで終わり』

ああ、そうだった。

最近はずっと側にいてくれてたから忘れていた。
あなたが残酷なほど自由な猫だということを。

『だからさよなら、アリス』

『待つて!!』

揺らめく長い尻尾。
闇の中へ溶けていく優美な体。
呼びとめても、もう待つてはくれない。

『待つてよお…!』

本当は初めから分かっていたの。
あなたが一か所には留まらないのだということを。
いつかは私の前から去っていくのだということを。
終わりは必ずやって来るのだということを。

『置いていかないでよ——…』

あなたは残酷なほど自由な猫。

誰にも捕まらず、気が向くままに生きていく。

『——クラウドッ……!!』

だから私はあなたをcloud——クラウド、と呼んでいた。
大空を自由に流れゆく、気ままな雲と同じ名で。

【chapter?】 sometime（後書き）

今回は気を失ったアリスが夢の中で見た過去の記憶の一部なので、短めのお話でした。

もちろんこの記憶チエシャ猫との記憶なのですが、ほんの一部すぎて意味不明な話になってますね（――；）

とりあえず、チエシャ猫の名前がクラウドで、アリスとは過去で何やら訳ありの関係だったということが伝わっていれば幸いです。

また後々ゆっくりとアリスの過去は明かしていくことにして、次回は物語を進めます！

ここまでこの『白兔は嗤う』を読んで下さっている方がいらっしやいましたら、本当にありがとうございます！

ヘタクソなりに頑張りますので今後もお付き合いして下さいと嬉し
いです！！

【chapter?】 Person in dream

「——ウド……」

夢の余韻を残した眩きと共に目を覚ます。

真っ先に目に入ったのは、何かを求めるように空に伸ばされた自分の腕。

果てしなく広がる空の青さを背景に、自分の腕の病的なまでの白さが映える。

「今のは……」

伸ばした腕をそつと胸のあたりに降ろす。

すると微かに脈拍の上がった自分の鼓動が、伝わってきた。
何かに締め付けられているかのように、胸が痛い。

「夢……?」

もう一度、目を閉じて考える。

ついさっきまで見ていた、夢にしてはやけに生々しかった映像。あまりに鮮明で今も脳裏に焼き付いて離れない。

悲しくも何処か懐かしい不思議な―――夢？

「本当に…？」

本当に、唯の夢だったのだろうか？

でも、だとしたらあれは？

夢の中に出てきたあのオッドアイは―――…。

「アリス？」

低く甘い声に名を呼ばれ、再び目を覚ます。

空の青さを背景に、私を見降ろしているのは猫耳を生やした男。世にも珍しいオッドアイが、心配そうに私を見つめている。

―――やっぱり、夢の中に出てきた人と同じ…。

熱情を秘めたピンク。

冷たく冴えた紫。

金色がかつた相反する二色の瞳。

それは夢の中で私を見つめていた瞳と同じ。
違いようもない、美しさ。

「大丈夫か、アリス？」

その姿も。

その声も。

夢の中に出てきたあの人と同じ。

私を置いていった、残酷なほど自由なあの人。
声の限りに求めた大切な人…。

「…あなた、誰？」

夢の中で私はあなたの名を必死に呼んでいた。

もう二度とその呼びかけに応えてはくれないと知りながら。

それでも呼んでしまうほど、あなたは私にとって大切な人だった。

それほどまでに私が求めていたあなたは、誰？

「チエシヤ猫」

「チエシヤ猫？」

—— 違う、それはあなたの名前じゃない……。

唐突に胸に浮かびあがった否定の思い。

それはあの夢のせいだろうか。

だって、あの夢の中で私はあなたのことを——

「……クラウド」

雲を意味するその名で呼んでいた。

残酷なほど自由なあなた。

一か所には止まらない気ままなあなた。

その姿が天空を自由に流れゆく雲と重なって見えたから。

ねえ、だからあなたの名前はクラウドでしょう？

「思い出したのか…？」

肯定とも言えるその言葉と共に、見開かれたオッドアイ。そのオッドアイに浮かぶ喜びのような光に、思わず目を逸らす。何故だかその光を恐ろしいと思ってしまったのだ。

「…ほんの少しだけよ。だからあなたの名前以外、よく分からないわ」

その名前が正しいのなら、きっとあの夢は私の過去。ただあまりに断片的で詳しくは思い出せない。

目の前の男の名前が、クラウドだということ。私にとってこの男は大切な人だったということ。そしてこの男と私が何やら過去で別れを経験しているということ。

今、分かっているのはそれだけ。

「そう、か…」

悲しげな声に視線を戻せば、寂しげに微笑まれた。
その微笑みのあまりの儚さに、胸が痛む。

ブレイスと戦っていた時はもつと余裕のある笑い方をしていたのに。
こんな笑い方をするなんて――…

――ブレイズ？

「あっ！！」

勢いよく起き上がり、辺りを見回す。

するとそこはもうあの白一色の世界ではなかった。

いや、目覚めた時空が見えたから野外なのだと思っただけ、
夢の事を考えていたせいですっかり自分の今の状況を忘れてしまっ

ていた。

「ここ何処!？」

見渡す限り、緑の木々。

だけど私が寝転んでいたところは芝生のような草が生えているだけ。どうやら此処は推測するに…森の中の開けた原っぱ的な所だと思われる。

「今さらそんな質問？」

涼しげな声でそういったのは当然ながらクラウドだった。

口元に意地の悪そうな笑みが浮かんでいる。

さっきまでの寂しげな微笑みはどうしたんだ、オイ？

幻か？

幻だったのか？

だとしたら私の胸の痛みを返せ。

「…此処は何処よ？」

若干イラつきながら再度問うと、クラウドは意地の悪そうな笑みをさらに深めた。

その笑みが余計に私をイラつかせる。

さっきまでのシリアスな雰囲気は何処に行ったんですかね？

「チエシャ猫の森」

「チエシャ猫の森？」

「そう。此処は俺の森ってこと」

誰のかはどうでもいいけど、やっぱり此処は森だったのか。

いや、木がいっぱいある場所っていったら森くらいなものだけどね。記憶は無くても、何だかそういう「常識」っぽいものは覚えているようだ。

「それで、何であなたは私を攫ったの？」

「攫う？人聞きが悪いな！。俺はあんたを助けてやったんだ」

「助けた？どういう意味よ？」

助けるも何も、私は別に危険な状態じゃなかった。

確かにブレイズが取り乱したときはちょっと——いや、かなり恐かったけど……でもブレイズが私に危害を加えようとしていたように
は思えない。

むしろ大切に……そう、まるで私が思い人であるかのように接してく
れていた。

「白兎はあんたの救いじゃない。あんたの破滅だ」

「破滅……？」

聞きとれるギリギリの低さで呟かれたその言葉に、思わず体が竦む。
鋭い光を湛えたオッドアイから目が逸らせない。

——その言葉、どこかで……。

「それ、どういう……」

「記憶が戻ればすべて分かるさ。——けどな……」

「え…？」

最後の低すぎて聞き取りにくかった呟きを問おうとすると、それを遮るように不意にクラウドが笑みを浮かべた。

皮肉めいた意地の悪そうな笑み。

さっきもこんな笑い方をしていたことを考えると、もしかしたらこれがクラウドの基本的な笑い方なのかもしれない。

「その話は置いて、あんた腹へってない？」

「へ？」

突然すぎる話題転換に、思わず気の抜けた返事をしてしまった。
今の話の流れでどうしてそうなるのだろう。

ああ、けどそんな質問されたせいで急に空腹を感じてしまった。
思い返せば、私ずっと眠ってたらしいし何も食べてないんじゃない？

「まあ、お腹すいてるって言えばすいてるけど…」

「よし」

そう言つと、クラウドが私を抱き上げる。
また「お姫様だっこ」という状態で。

「ちょ、ちょ、ちょっと待った！これ、かなり恥ずかしいんですけど……！しかも何処に行くつもりっ……」

「黙つて。じやないと舌噛むよ？」

反抗しようとして再度開きかけた私の口はすぐ閉じることとなった。
時速何キロ？って感じの物凄い速さでクラウドが走りだしたから。

——もう何が何だか……。

クラウドが何故私を攫い、あんな言葉を言ったのかも。
これからどこへ向かうのかも。
結局、分からないまま。

『記憶が戻ればすべて分かるさ』

さっきのクラウドの言葉が蘇る。

すべての謎の答えは私の記憶の中。

つまり、答えが知りたいなら忘れた記憶を思い出せってことでしょ？

—— だったら何であんなこと言っのよ……。

低くて聞き取りにくかったクラウドの呟き。

もう一度問おうとした呟きが頭の中に反響する。

『忘れていた方が、あんたにとっては幸せだろうけどな……』

【chapter?】 Person in dream（後書き）

だいぶ過ぎましたが、あけましておめでとうございます。

そして久々の更新です。

読んでくださっている方々、更新の遅い作者ですいません（ー；）
春になったらもっと早いペースで更新できると思いますので、どうか見捨てないでやってください（<ー>）

話は変わりますが、感想を送って下さった方がいました！

返信はしたのですが、とても励みになったので、この場でもお礼を
させていただきます。

ありがとうございます！

それでは今年も『白兔は嗤う』をよろしくお願いします。

おまけのキャラ紹介←

キャラクターその3

【名前】 チェシヤ猫

【アリスからもらった名前】 クラウド（cloud——雲）

【性別】 男

【外見年齢】 17〜18歳くらい

【容姿】 金色混じりのピンクと紫のオッドアイ、紫の中にピンクの

メッシュが入った髪、ブレイズと同じくらいの長身、猫耳と尻尾を生やした派手な美形

【服装】何故か所々破れていて無駄に露出度の高いゆったりめの黒い薄手の長袖シャツとズボン、脛辺りまでのミドル丈のブーツ

【持ち物】銀の細い鎖を通してペンダント状にした二つのシルバールング、毒物を含む薬の瓶を数本

【武器】黒い二丁の銃

【性格】自由をこよなく愛し、縛られるのが嫌い。神出鬼没。意地悪で皮肉屋であるけれど、意外と優しい一面もある。昔は今の姿からは想像もできないほど純朴でフェミニストだったらしい。

キャラ紹介は物語が進むごとに少しずつ詳しくしていきたいと思うので、たまにチェックして下さるとより物語が分かりやすくなるかと思います。

【intermission】 crimson dolls

昔話をひとつしよう。

君は知っているかい？

『crimson dolls』のことを。

『crimson dolls』は魔力を持った人形。

とある少女によって作られた命ある不思議な人形なんだ。

一見すると人形だなんて分からないけれど、彼らを見分けるのは簡単さ。

作り手である少女が与えた、三つの緋い刺青を見つければいいんだもの。

ひとつは右の手の甲にある武器の形をした刺青。

ひとつは左の手の甲にある扉の形をした刺青。

ひとつは体のどこかにある彼ら個人個人を象徴する刺青。

もしもこの三つの刺青のうちの一つでも持っている者を見たならば、すぐに逃げた方がいい。

彼らは暗殺を生業としているからね。

あまり深く関わると、きつと後悔する。

血濡れた未来は嫌だろう？

『crimson dolls』は暗殺者集団であるけれど、もともと暗殺用のために作られたわけじゃない。

本来の目的は作り手である少女の孤独を癒すということだったんだ。彼女は生まれながらにして重い十字架を背負わされた哀れな少女。

魔力と数奇な運命を持つあまり、彼女はいつも孤独だった。
だから彼女は考えたんだ。
誰も傍にいないなら、作ればいいのだと。

少女は自分の魔力を用いて、いくつも人形を作りだした。
ただの人形じゃつまらないからと自分の永遠にも近い命を分け与え、武器と血肉と感情を持った人形を作りだした。
お気づきの通り、それが『crimson dolls』さ。

孤独な少女が『crimson dolls』に求めたのは愛情。
彼女は永い時を一人で生きてきたから、その孤独を『crimson dolls』の愛情で埋めてほしかったんだ。
孤独を癒せるのは、きっと愛情だけだからね。

けれど少女は大切なことを忘れていた。
いや、知らなかったというべきかな。
彼女はずっと孤独だったから、愛情というものをよく分かっていなかったんだ。

愛というものは愛してこそ得ることができる。
とりわけ人形は愛を与えなければその愛を返してくれない。
そのことを、彼女は知らなかったんだ。

だから『crimson dolls』に自分が愛されることばかりを求め、愛を与えようとはしなかった。
氣にいらなければ壊こわして、また新しく作り変える。
作り手に氣にいらなかった人形の末路は、哀れなものさ。

そして『crimson dolls』は壊こわされるという恐怖に震えた。

さつきも言った通り、命ある『crimson dolls』には感情だつて意志だつてちゃんとあるんだ。
人形にとって作り手に壊こわされるということは、何よりも恐ろしく悲しいこと。

だから、『crimson dolls』は壊こわされないように一生懸命少女を愛した。

恐怖という感情から生まれる、空っぽの愛を彼女に与えたのさ。

本物の愛を知らない少女はそれでも満足だった。

けれど『crimson dolls』はいつも本物の愛に飢えていた。

『crimson dolls』は本物の愛を知っていたんだ。

だって、理由はどうであれ生み出されるその時に少女はちゃんと人形に愛を吹き込んでいたから。

自分を愛するように、という愛を知らず知らずのうちに吹き込んでたのさ。

だから『crimson dolls』は本物の愛を求める。

その素晴らしさを、一度とはいえ味わってしまっていたから。

そして『crimson dolls』の飢えはどんどんとひどくなり、彼らは正気を失った。

狂った彼らは互いに殺し合いをするようになった。

少女を守るために与えられた武器で仲間を血で染めあげ、少女に分け与えられた命の源を互いに奪い合ったんだ。

相手を壊す時に得られる高揚感と達成感が、彼らの飢えをほんの一時忘れさせてくれたから。

作り手である少女は『crimson dolls』の殺し合いを見て、なんと喜んだ。

彼女にとって目の前で展開される殺し合いは迫力のある人形劇にすぎない。

『crimson dolls』は作り手である少女を殺すことはできないし、壊された人形はまた作りなおせばいい。

だから少女は安心して楽しめたんだ。

永遠とも言える命を持つ彼女は、平坦な日々には飽き飽きしているところだったから。

けれどあんまりにも『crimson dolls』が互いに殺しあうから、少女が住む世界は徐々に乱れ始めた。

壊された人形を作りなおすのだって簡単なことじゃない。

だから少女は人形たちに異世界へと渡る魔力を与え、彼らに暗殺業をさせることにしたんだ。

だからと言って、少女の世界での殺し合いが無くなったわけじゃないんだけどね。

永い時を経た今でも定期的に行われているそうだよ。

さて、これでお話はおしまい。

面白かったかい？

『crimson dolls』——『血なまぐさい人形達』の
話は。

【intermission】 crimson dolls（後書き）

目次の部分をちよつと変えてみました。

これからはより物語らしく章で区切つていこうと思います。

今回の話は第二章の序章的なものです。

後になって意味が分かるようになっていますが、勘のいい方は『crimson dolls』が何のことか、孤独な少女が誰かお気づきになるかもしれません。

第一章はアリスの目覚めをコンセプトとして書いたので、第二章からはいよいよアリスの記憶探しが本格化していきます。

『緋月の国』の成り立ちや秘密なんかも明かしていきたいと思ひます。

今回はチェシャ猫にアリスを奪われた後のブレイズの話、または『Person in dream』の後のチェシャ猫とアリスの話のどちらかを書きます。

ちなみにブレイズの方だった場合は女王様が、アリスとチェシャ猫の方だった場合は帽子屋さん達を登場させる予定です。

そして最後に一言。

またまた感想を送って下さった方がいらっしゃいました！
本当にありがとうございます。

未熟な作者ですので、感想・評価などいただけると大変助かります。
どうぞ、よろしく願います！

【chapter?】 revasal（前書き）

アリスをクラウドに攫われた直後のブレイズの話です。

願い事ひとつ。

今も昔も、きつとこれからも変わらない。
そんな願いが、ひとつだけあるんだ。

* *
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「アリスッ!!」

叫ぶ僕の目の前で、アリスと彼女を抱き抱えているチエシャ猫の姿が空間に溶けていく。

チエシャ猫の得意魔法である「瞬間魔法」が発動しているのだ。

必死に駆けより、あと少しでアリスに手が届くその瞬間に二人の姿は僕の目の前から完全に消え去った。

伸ばした手が虚しく空を掴む。

「アリス…ッ!」

さつきまで。

ほんのついさつきまでこの手は彼女に触れていたのに。
温かく柔らかな彼女の肌を確かにこの手で感じてたのに。

「あ…あああああああッ！！」

500年も待ち続けてようやく触れた愛しい人。
500年も待ち続けてようやく声を聞けた愛しい人。
500年も待ち続けてようやくその瞳に映れた愛しい人。

何故、彼女は今ここにいない？

「チエシャ猫おおおおおおおおおッ！！」

消えゆくその瞬間こちらを見た猫の姿が蘇る。

薄い唇を厭味つたらしく歪めて。

金色混じりのピンクと紫の瞳に勝ち誇ったような光を浮かべて。

僕からアリスを奪ったその汚らしい手をひらひらと振って。

微かな笑い声と共に消えた、憎たらしい猫のシルエツト。

悪趣味なピンクと紫の残層が今も目の前から消えない。

「ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなッ!!」

怒りと共に湧き上がる殺人衝動。

焦燥にも似たこの感覚。

癒せるのはたったひとり。

待ち続けた最愛の少女だけ。

だけど、彼女は傍にいない。

「いつもいつもいつも邪魔しやがってあのクソ猫ッ!!」

あの日だって。

500年前の「緋い月夜のお茶会」の日だって。

アイツは僕の邪魔をした。

僕の願いを叶える最高のチャンスを、アイツは台無しにしやがった。

「どうして、いつも、上手くいかないッ、もう少して…そう、もう少しなんだよッ! ずっと、ずっと、待ってたのに…なのにいつも邪魔が…アイツが、あのクソ猫がッ!…なんで、どうして、

喉が痛い。

頭が痛い。

握りしめた手が痛い。

そして何よりも、
胸むねが痛い。

『おいで』

不意に頭の中に響いた聞き慣れた声。

叫び続ける僕をなだめるように静かにゆっくりと発せられた言葉。
まるで脳内を犯されているような、そんな感覚。

『帰っておいで、白兔』

その声に呼応するように足元が緋^{あか}い光に包まれる。

その光から逃れようとしても、逃がさないというようにその光は僕
を包み込む。

まるで実態があるかのように粘着質に絡みつかれ、僕の視界は緋^{あか}く
染まった。

「やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ。」

抵抗も虚しく、僕の体は完全に緋い光に包まれた。そして沈んでいくような感覚と共に、意識が徐々に薄れていく。体中の力が抜け、視界が緋から黒へと変わる。

「やめろ……」

『誰に向かってそんな口を聞いているの、白兔？』

耳元で囁かれる声に。
鼻をかすめる薔薇の香りに。
肌で感じるその気配に。

僕という存在すべてが甘く犯される。

『あんまり生意気だと壊こしてしまうわよ』

邪気を感じられない笑い声と共に吐き出された絶望の言葉が、混沌とした意識の中に響く。

そのたった一言に僕は……僕はいつだっておびえていた。その一言が決して冗談ではないことを知っているから。

「す……み、ませ……ん……陛下」

『そう。いい子ね、白兔』

あなたは、僕らの女王。

絶対的存在である僕らの作り手。

僕らは常にあなたに縛られて存在していた。

だけど、それは僕にとっては昔の話。

——僕はもう、あなたの存在におびえはしない。

今や僕はあなたを凌ぐ魔力を手に入れた。

あなたの古き魔法は今だ僕の存在を縛るようにこの身の奥深くで確かに息づいているけれど、それだって僕にとってはもうとるにたらない微かなもの。

逃れようと思えば簡単に逃れられるんだ。

——あなたを葬ることなんて今の僕にとっては簡単なこと…。

だけど、まだ暫くはあなたに縛られているふりを続けてあげる。
あなたの従順なお人形のふりをしていてあげる。
僕はね、待っているんだよ。

あなたから完全に解放されるに相応しいその日を。

『お帰り、私の可愛いお人形さん』

今ではあなたが僕のお人形さん。

僕と立場が逆転していることにも気がつかない、哀れなお人形さん。

——願いを叶えるその日までせいぜい可愛がってあげるよ。

そして、すべてが終わったその時には。
僕があなたを壊してあげよう。

【chapter?】 revasal（後書き）

というわけで今回は久しぶりにブレイズくん登場です。

相変わらず狂ったり冷静になり情緒不安定な彼。

狂った奴ばっかの「緋月の国」の中でも一番ヤバイ奴だと作者は密かに考えております。

前回予告した通り女王様を出そうと思ったのですが…また声だけの登場となってしまう（ー；）

今回こそはもっとしっかり登場させようと思ったのに失敗orz

135

それと女王様についてのお知らせなのですが、以前『I・m…（2）』で出た時の女王様の話し方を修正しました。

私の思い描く女王様像が前と少々変わりましたので変更させていたきました。

それでは次回もよろしく願います！

【chapter?】

command(前書き)

今回は女王様視点です。

【chapter?】 command

手に入らないものなんて何もない。
不可能なことなんてあるわけない。

だって私は女王。

この世界は私のものなのだから。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「う…」

小さな唸り声と共に、ゆつくりと開かれた瞼。
そこから覗いた紅い瞳が放つ視線が僅かに辺りを彷徨った後、ピタリと私に向けられる。
ルビーのような真紅の瞳。
私の好きな色を宿した美しい瞳。

「へ、い…か…」

「お目覚めの気分はいかが？白兔」

頬杖をついた状態で覗きこんでいるせいで、白兔と私の顔はすごく近い。

そんな至近距離でも美しい彼の端正な顔に私は一人満足する。いつ見ても我ながらいい出来だ、と。

「ここは…陛下のお部屋ですか？」

「そうよ」

そう呟くと白兔は私から顔をそむけ、ゆっくりと起き上がる。

紅い瞳が僅かばかりの間部屋を見回した後、その視線を私に戻した。起き上がったせいで頬杖をつく私より高くなった紅い瞳を上目づかいに見つめ返す。

「相変わらず緋色一色ですね」

「ふふ、素敵でしょう？」

私が寝そべり、白兔が座っている円形の大きなベッドも。

そのベッドを包む天蓋や、シーツ、掛け布団も。

さらには天蓋の向こうに広がる部屋の調度品からカーペット、そして壁までも。

私の部屋は緋色一色でまとめられている。

「一色では見栄えがあまり良くないとあれほど申したはずですが」

「何百年前の話よ、それ。300年くらい前だったかしら？」

「800年前です。それから200年ほどの間は申し上げ続けました」

「あら、そんなに前だったの？しかも200年間も言い続けてたなんて、お前もよく飽きなかったもんだね」

「陛下の身の回りの世話も私の仕事ですから。それよりもそれだけ申し上げ続けたのに綺麗さっぱり忘れられていることの方が心外です」

「お前は本当に神経質ね。いいじゃない、緋色一色だって。私はこの色が好きなのよ」

赤色を基調とした色は全部好き。

けどその中でもこの色は特別。

唯の赤色よりも濃い緋色。

それはこの世界を象徴する色。

そして何よりもあの子が私に良く似合うと褒めてくれた色。

だから、私はこの色を何色よりも好み特別に思っているのだ。

「ですが」

「白兔。私の言葉は絶対……………そうでしょう？」

私は女王。

私は作り手。

この世界は私のものなのだから。

だから、私の言葉は絶対の命令なのよ。

「…そうですね。言葉がすぎました」

「ふふ、お前は本当にいい子ね」

物分かりのいい白兔。

私の最初の作品であり最高傑作である人形。
彼以上の人形はまだ作れていない。

「だからお前だけは一度も壊こわさないで今まで傍に置いてきたんだものね」

何度作りなおしても私に盾つくガラクタどもとは訳が違う。
永い永い時を忠実な僕しもへとして仕えてきてくれた、私の可愛い可愛いお人形さん。

「お前は優秀な子よ」

「恐れ入ります」

「だからこそ今回のお前の失態、許せないのよ」

「陛下……」

「チェシャ猫ごときに何を出し抜かれているの、白兔？」

白兔の心臓とも言える、私の魔力の塊を埋め込んだ場所を睨みつける。

私の意志に従うように自分の体から魔力が流れ出る。
そして流れ出した魔力が白兔の魔力の塊を刺激する。

「——アアアッ！！！」

身を投げ出しのた打ち回る白兔の姿に、思わず笑みが漏れる。
いつ見ても素晴らしいと思う。

相手が自分の力の前に屈する光景というものは。

「チエシヤ猫はガラクタよ」

魔力を緩めてやれば、白兎はのた打ち回るのをやめて大人しくなる。肩で息をつきながら荒い呼吸を繰り返す白兎の姿にまた笑みが浮かぶ。

乱れていても美しいなんて、さすが私の最高傑作。

「どんな理由があっても優秀なお前が失態を犯すなんて、あつてはならないことなの」

お前は私の忠実な最高傑作。

チエシヤ猫は私に逆らうガラクタ。

だからね、白兎。

お前がチエシヤ猫相手に失態を犯すということは、作り手としての私のプライドが許さないの。

「二度目は無いと思いなさい」

もしもまた失態を犯すようなことがあったならば。
さっきのように出し抜かれることがあったならば。
お前はもう私の最高傑作なんかじゃない。

「次は、壊すわ」

使えない人形はすべてガラクタ。
ならば壊して作り変えましょう。
ちゃんと使えるように作り直してあげるわ。

「それが嫌ならちゃんとアリスを私のもとへ連れてきなさい」

可愛い可愛い私のお人形さん。
壊ころされるのが嫌ならば私の命令おねがいを聞いてちょうだい。
私のもとから逃げ出した、大好きなあの子を、愛しい愛しいあの子
を私のもとへ連れ帰ってきて。

「わかった？」

「……………御意」

手に入らないものなんて何もない。
不可能なことなんてあるわけない。

だって、私は女王。

この世界は私のものなのだから。

永遠に、
ね。

【chapter?】 command (後書き)

更新が遅くなってしまいました(ー；)

本当に亀の子更新で、お気に入り登録してくださっている方々には申し訳なさが募るばかりです。

もう少し早く更新できるよう頑張りますので、どうぞ見捨てないでやってください(＜ー＞)

さてさて、今回は初めての女王様視点。

やっと女王様をちゃんと登場させられてよかった

——なんて安堵してたら女王様の容姿がまだ謎のままじゃないですかッ(@――@；)!!!!

書き終えてびっくりしました。

次こそは…次こそはちゃんと描写をいたします…！

こんなダメダメな作者の作品に感想を下さった方々、そしてお気に入り登録をしてくださっている方々、本当にありがとうございます！これからもどうぞよろしく願います。

【chapter ?】 in the dungeon (前書き)

今回は白兔視点です。

【chapter ?】 in the dungeon

地下へと続く石造りの螺旋階段。

指を一振りし魔力を飛ばせば、階段と同じ石造りの壁に点々と備え付けられていた蠟燭に赤い炎が灯る。

地下特有の漆黒の闇を焦がすようなその炎の明るさを頼りに、陛下から解放された僕は地下へと歩みを進めていた。

——血の匂い……

一歩一歩、歩みを進めていく度に濃厚になる生臭い血の臭い。
慣れ親しんだその臭いが生温い風と共に、這うようにして地下から

吹き上がってくる。

いつもなら殺人衝動を呼び起こすその匂いに、今は苛立ちを感じた。僕の計画では、今この瞬間にここで血の匂いがしては都合が悪いからだ。

——アイツら、僕の命令を無視したな……

いささか歩みを速め、目的の場所である地下牢に降り立つ。

ずらりと奥に並んだ牢のほとんどから、赤い液体が流れ出していた。すでに乾き始めて赤黒くなっているものもあれば、まだ鮮やかな赤色を保ったままのものもある。

「ダム、ディー、出て来い」

そう一声かけると、僅かな沈黙の後にクスクスという笑い声が聞こえてきた。

次いで、風が僕の周りを駆け回るように吹き、それが止むと僕の腰の辺りに双子の子供が纏わりついていた。

「やあ、白兔！」

「遅かったね！」

「白兔があんまり遅いから」

「僕らがぜーんぶ壊しちやったよ！」

キヤハハッ！と無邪気に笑いながら双子は矢継ぎ早に話しかけてくる。

爛々と瞳を輝かせ、あからさまに興奮しているのが見て取れる。

僕の命令など欠片も覚えてないだろうその姿に苛立ちが沸き上がる。

「五月蠅い、黙れ」

こみ上げる苛立ちを隠さない声でそう言うと、ぴたりと双子の笑い声が止んだ。

魔力で二人を腰から引き離し、地面に思いっきり叩きつけるとくぐもったうめき声が二つあがる。

僕はその姿を無感情に見つめながら、次の言葉を発した。

「僕はお前らに言ったよね？トランプ兵を無闇に壊こわすことは、今は控えろって」

トランプ兵は僕たちと同じく女王によって作られた人形。

ただし、心は与えられず肉体だけを与えられた完全なる捨て駒。

同じ人形であっても、心を与えられた僕らとは格が違うできそこないの人形だ。

女王は様々な雑用と城の警護をさせるためにこのトランプ兵を増産

したのだが、どうにもこうにも数が多すぎて城の中に置いておくことができなかった。

おまけに女王は自らが手を抜いて作ったものであるというのに、「捨て駒のできそこないなんて美しくないわ。見たくもない」という理由でその目に映る所にトランプ兵がいることを嫌った。

そのため溢れかえったトランプ兵たちの居場所として適当な場所は、地下牢しかなかった。

だからこそこの広大な地下牢のほとんどは常時トランプ兵たちで埋め尽くされているはずなのだが、今は一体も見当たらぬ。

「お前ら、僕の命令を聞いてなかったの？それとも聞いてたのに無視したってこと？」

僕らは常に抗いがたい殺人衝動を抱えている。

その捌け口としてトランプ兵を壊すことはいつものことなので、気に留めることもない。

陛下も僕らがトランプ兵を壊すことは認めているので、足りなくなったら陛下に頼めば増産してもらえる。

しかし、今はアリスを連れ戻すための駒が必要だ。

それはひとつでも多いほうがいいに決まっている。

だからこそトランプ兵を壊すことを控えて、アリス奪還の駒に回すようにこの地下牢の責任者である双子に命令を下したのはつい数時

間前のことのはずだった。

「う、ごめんなさい…」

「どうしても、抑えられなくて…」

身を寄せ合い、震える双子。

こいつらが本気で謝っているのかはわからない。
何せ僕ら人形は嘘を吐くのが上手いから。

「今は一秒でも時間が惜しいんだ。それこそ陛下に新しいトランプ
兵を作り出してもらう時間すらね。この時間の損失、お前らはどう
埋め合わせするんだ？」

再び魔力で双子を捕え、その細い首を締めあげる。

ぐうつと呻き声を漏らした双子の唇から、徐々に酸素が失われている。

あと一步で意識が落ちるところで、僕は魔力を緩めた。

その途端に双子は酸素を取り戻し、激しく咽かえる。

「わかつてるよね？お前らを壊こすことなんて僕にとっては大したことだし、その権限だって陛下からもらっているんだ」

僕は女王に作られた最初の人形。

魔力も知能も身体能力もすべて他の人形たちよりも優れている。

だから僕は女王の一番のお気に入り。

人形たちの頂点にいるのは、この僕。

そして、今僕は陛下すら凌ぐ力を手に入れた。

僕を魔力で今だ縛り続けられていると思うている陛下の目を欺くことすらできたのだ。

あの緋色の部屋で僕にアリスを取り戻せと言った陛下の目は優越感

に満ちていた。

陛下の魔力に苦しんでいたのも、陛下を恐れるようにその命令に従うと言ったことも、全て全て僕の演技だと見抜けずに、嗤っていた。陛下の魔法なんて、もう僕には効かないのにそれを見抜けなかった彼女はなんて愚かなのだろう。

そう思いながら嗤っている陛下を、僕は心の中で嗤っていた。

「今、お前らを壊すことはトランプ兵以上の損失になるから壊さないけど、二度目はないよ。次に僕の命令を無視したら、問答無用で壊すから。いい？」

笑顔でそう言つてやれば、まだ荒々しく息をしていた双子は身を寄せ合い、二対の良く似た瞳で僕を見つめ、頷いた。

その様子に僕は笑みを深める。

双子の瞳に浮かんでいたものが紛れもない恐怖だと、今度ははつきりと見て取れたから。

「分かったんなら、行くよ。お前らが壊したトランプ兵の補充を陛

下に頼みに行くんだ」

「……………ねえ、白兔。どうして今こんなにトランプ兵が必要なのか？」

「『PUPPET PLAY』が開催されるなら帽子屋達と戦うために必要だろうけど、この間やったばかりだから暫くはないだろうし……」

『PUPPET PLAY』というのは、僕たち人形が二つの勢力に分かれて戦う殺し合いのことだ。

殺人衝動を抱えている僕らは、陛下の力により異界へと渡り暗殺業を生業としてそれを発散させているけれど、時々それでは足りなくなる時がある。

陛下を除いて、僕らを壊せるほどの力を持った者は異界にもそうそうおらず、ほとんどの場合が殺人衝動を発散しきれずに終わるのだ。その発散できなかった殺人衝動が貯まりに貯まった時に開催されるのがこの『PUPPET PLAY』だ。

同じ人形同士なら思う存分に力を発揮できるということで、僕らは殺人衝動を発散でき、それを観戦する陛下にとっては絶好の暇つぶしとなる催しなのである。

「アリスが『再生の眠り』から目覚めた」

そう言うのと、双子はもともと大きな瞳を零れ落ちそうなくらいにまで見開いた。

先ほどまで恐怖に染められていた瞳に爛々とした輝きが灯り、血の気の失せていた頬に赤みが戻る。

キラキラとした子供特有の興奮に満ちた雰囲気は双子の周りに溢れ出した。

「アリスが起きたの!？」

「いつ!? いつ起きたの!？」

「また遊んでくれるかなっ？」

「僕らのこと、名前で呼んでくれるかなっ？」

「またぎゅーって抱きしめて」

「頬ずりしてくれるかなっ!？」

「いつもみたいに、笑って」

「ほつぺにちゅーってしてくれるかなっ!？」

「「ねえっ、白兔!アリスは何処にいるのっ!？」」

先ほどまで意気消沈していた様子など嘘のように、瞬く間に双子はきやいきやいと騒ぎだす。

どうやら色々と聞き捨てならないことを僕の知らないところでアリスとしていたようで、また双子に対する殺意が沸いてきたが、どうにか抑える。

ここで戦力を減らすわけにはいかない。

「アリスはチシャ猫に攫われた。だから恐らく、帽子屋の屋敷にいるだろう」

僕の言葉に、双子はぴたりと騒ぐのをやめる。

そして2人で顔を見合わせてから再び僕を見上げる。

その瞳は紛れもない、血濡れた瞳だった。

「それじゃあ、アリスを取り戻さないかね」

「帽子屋たちになんて、あげないよ」

「だってあそこはアリスの居場所じゃないもの」

「アリスは僕ら王宮側のものだからね」

アリスは僕らではなく、僕だけのものだと言いたいのを堪え、僕は微笑んだ。

この手にアリスを取り戻すためならば手段なんて選ばない。使えるものは全て使う。

そのために僕は微笑んで心にもない嘘の言葉を吐く。

「そう、アリスは僕らのものだ。だから取り戻しに行くよ。時間の損失の埋め合わせの分も、しっかりと働けよ」

「「うん！」」

そうして、僕は双子を引き連れ血生臭い地下牢から出て行った。

さあ、特別な『PUPPET PLAY』を開催しよう。

それは『アリス争奪戦』と言う名の演目の、血濡れた惨劇。
狂いに狂った人形たちによる、狂気に満ちた人形劇。

ねえ、アリス。

これはどんな終焉を迎えると思う？
君次第で、全ては変わるんだよ。

願わくば、僕の思い描いている通りに。

だって、そうでなければ僕は君を――

【chapter ?】 in the dungeon (後書き)

前回っていつ書いたっけ？ってくらい久々の投稿です…

実はもう少し前にでき上がってたんですけど、パソコンの調子が悪くてレイアウトが上手くいかずに投稿まで長引きました。

それにしても遅すぎますよね… 申し訳ありません；

女王様や今回登場した双子の容姿的描写がありませんが、すべてのキャラクターの容姿はアリス視点から書くことにしたので、アリスが彼らに出会うまでは書きません。

なるべく早く出会わせたいものです…

読んでくださっている方がどれだけいるかわかりませんが、個人的に好きな作品なので絶対に完結はさせたいと思っています。

本当に遅くて謝るばかりの作者と作品ですが、今後もお付き合いいただけると嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4348h/>

白兔は嗤う

2011年7月28日12時53分発行